
東方喧闘記

@レイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方喧闘記

【Nコード】

N9260S

【作者名】

@レイク

【あらすじ】

なぜか突然幻想入りした主人公が頑張る話。

チートオリ主です。

原作崩壊やキャラ崩壊起こすと思います。

それがだめな方はブラウザバックでお戻りください。

他の作品を読んで似ないようにはしますが、似ている所があればご一報ください。

出来るだけ修正します。

更新は不定期ですが出来るだけ早めに投稿します

タイトルを東方普通人から東方喧闘記に変更しました

1話（前書き）

はじめまして。

レイクと申します

他の方の作品を読む内に自分でも書いてみたくなり、やっちゃんま
した

初投稿なのでg d g d展開になったり気に入らないという展開にな
ったりすると思いますが、暖かく見守って下さい

1話

目が覚めると、そこは真つ赤な景色が浮かんでいた…

――――――――――

「あーあ、学校だるいよなあ」

「お前いつもそれ言ってるのか？」

「だるいもんはだるいんだから仕方ないだろ。
てことで次サボるから適当に理由でつち上げといってくれ」

「また保健室で寝るつもりか？
いい加減にしないと怒られるぞ？」

「その時はその時だって、
じゃあ頼んだぜー」

――――――――――

ああ、そうだ、俺は確かに寝ていたはずだ。
こんな目に悪いような場所ではなく、保健室のベッドの上でだが。

そしてあの赤いのマグマだよな？
なんかテレビとかで見た事ある気がするぞ…

とりあえず、なんで俺がこんな状況なのかは置いてだ、
誰かいなか捜そう。

このままここにいたらやばい気がするからな…

1話（後書き）

主人公の名前は次かその次でです
主人公と話していた人はモブなので今後出る予定はないですw

2話（前書き）

2話目ですがすでに書き溜めてたのを修正します

2話

あれから数時間ほど歩いただろうか。

二つほどわかった事がある。

まず一つ目は、ここが東方の世界かもしれないということだ。どうやら俺にも○○程度の能力というのが付いたらしい。

その名も

『ありとあらゆる環境、場合、能力に普通に対応する程度の能力』
なげえ、しかもわかりずれえ。

しかしどうやらこの能力のおかげでこのマグマに囲まれている環境でも平然としていられるようだ。

この能力については疑問点が多いが次の分かった事に移ろう。

二つ目は、ここが恐らく旧地獄、つまり地底だと思われるということ。

理由は幻想郷にこんな場所は旧地獄くらいしかないだろうと判断したためだ。

しかしながら能力と居場所が分かって、どっちに行けばいいのかわからないわけで・・・

「あああああ！！！！」

もうなんでもいいから助けてくれええええええええええ！」

と、対応できても対処の仕様がないう場合はどうにもできなくなるのだ。

「お兄さん、こんな所で迷子かい？」

「あ？」

周りを見渡すと、ネコ耳尻尾の美少女・・・ていうかお燐がいた。

「はじめまして、あたいは火焰猫^{かえんびょう}燐^{りん}。

お燐でいいよ。お兄さんの名前は？」

「俺^{むげん}は武幻^{きょう} 恭^{きょう}だ。よろしく」

まさかの原作キャラとの遭遇かよ！

ていうか、やっぱりここって地底だったんだな。

「お兄さん・・・恭も珍しいねえ、地獄で迷子になるなんて。

とりあえず、ここじゃなんだから、あたい達の家まで連れて行ってあげるよ。

きつとさとり様も許してくださるだろし」

家ってことは地霊殿か。

さとりやこいしにも会ってみたいし、何よりここにいるのはもう嫌だからな

「じゃあお言葉に甘えさせてもらつよ」

言い忘れてたけど、こっちに来てから即飛べるようになりました。多分能力で対応したんだろうねえ・・・便利便利

そして俺達は地霊殿へと向かって飛んでいくのだった・・・

2話（後書き）

って事で2話目終了です。

能力と主人公の名前が登場ですね。

まず能力についてですが・・・
結構なチートです、はい。

弾幕ごっこや真剣勝負に例えると
それぞれの相手に対応することによって、
弱点を正確についたり相手に手を出させなかったりします。

相手の能力にも対応することができ、
対応した場合はその能力を扱えるようになるって感じですよ。
扱える他には相手の能力が自分に効かなくなったりもできます。

環境に対応するのは言葉通り、
寒暖はもちろん体調や病気、その他もろもろに至るまで対応します
（例：病気、体調不良 ↓ それぞれの特効薬を飲んだみたいになる
寒暖 ↓ 慣れる、そして火傷や凍傷にならなくなる ってな
感じです

名前についてですが、適当です、はい

3話（前書き）

もつすでに前もって書いておいたモノの形がない＼（＾Ｏ＾）／

3話

って事で着きましたと、地霊殿！

「おお、でつかいなあ」

「まあ地獄の中心だからね、この主があたい達の飼い主様、さとり様だよ」

そついや俺の能力ってさとの能力にも対応するのかね？
ちよつと気になるなあ。

「ほら、さとり様の所まで案内してあげるよ。ついてきてね」

「ああ、ありがとな」

そついやこいしもいるんだよねえ・・・
色々といたずらとかなんとかされそうだけど、それに対応すれば大丈夫かな？

「ここがさとり様のお部屋だよ」

と、考え事してる間についたみたいだな
でけえし豪華な感じがするな！。

「ちよつとさとり様を呼んでくるからここで待っててね」

「何から何まですまんねえ」

とか言ってる間にもう部屋に入って行っちゃったよ。
さてさて、今のうちに考え事纏めとくかな。

1・俺は幻想入りした。それも結構な能力付きで
チョンチョン

2・今は地霊殿に居る。が、まだお空は守矢神社の神々と接触して
いないようだ。

どうやら少しだけ過去に来ているみたいだな。

(ねえねえ、聞こえてるんでしょ) チョンチョン

3・なぜかこいしが俺に張り付いている

「で、何か用かな？古明地こいしちゃん？」

「やっぱり気づいてたんだ！すごい！」

「そりゃあれだけ突っつかれれば気づくつての。
で、何の用だい？」

「お兄ちゃんってさ、お姉ちゃんに会いにきたの」

・・・ゴハアアアアアア！

やばいやばい、リアルこいしにお兄ちゃんって呼ばれるのがこんな
にやばいとは・・・

能力使って対応しなければ即死だったぜ・・・

「？」

やばいわぁ、かわいいわぁ、お持ち帰りしたいわぁ。

「あ、ああ、そうだよ。俺はさとりさんに会いに来たんだ」

「へー、なんのために会いに来たの？」

「んー、出来れば数日間、若しくはかなり長い間泊めてもらえないかなー？とか思ってたね」

「そうなんだー、あ、お隣が来たみたいだね。じゃあ私は行くね。またねー」

「おう、じゃあなー」

「恭ー、さとり様が会いたいつて着いてきてー」

「分かった」

さてさて、さとりとの対談ですかねえ・・・

3話（後書き）

って事で3話でした

ほんととはさとりんとお話までもっていく予定だったんですけどね、
こいしちゃんが・・・こいしちゃんがああああああああ
って事でこうなりました

あ、東方キャラの口調は基本作者のイメージですので
ご了承ください

4話（前書き）

なんか読み返したらすっごい1話1話が短かったんで、
出来るだけ長くするよう頑張ります

4 話

「ようこそいらつしゃいました、
私はこの地霊殿の主、古明地さとりこめいじ さとりと申します」

「俺は武幻恭です」

「もっと気楽に喋っていただいて結構ですよ」

「ああ、悪いね。」

「どうも敬語とかは苦手なんでね」

「それで、あなたは何者です？」

私の能力、『心を読む程度の能力』でもあなたの心が読めないのですが」

やっぱり、こいしの事で薄々思ってたが

他の人（？）の能力にも対応するみたいだな・・・

「ああ、それは多分俺の能力のせいだな。

俺の能力は『ありとあらゆる環境、場合、能力に普通に対応する程度の能力』だ」

「なるほど・・・

その事については後で聞くとして、あなたはなぜこの旧地獄にいるのですか？

能力持ちとはいえ人間がこの地底に居るのはおかしいのですが・・・

「

「その事に関しては俺にもわからんね。
俺も寝て、起きたら地獄にいた、っていう程度の認識だからな」

俺が未来の事を知っているということは黙っておいた方がいいだろうな・・・

今が何時かは分からんが、恐らく東方地霊殿は起こっていない。
お憐がお空の話をする時にそれらしい事は言っていなかったからな。
それをバカ正直に話して場を混乱させる気は毛頭ないしな。

「大体の事情は分かりました。

恐らくまたあのスキマ妖怪の仕業でしょう。

ただ、地上に送り返す事はしばらく無理なのでその間はここに泊っていただくさい」

まあそうだろうな。

地底ってのは地上で忌み嫌われた妖怪とかが集まってる場所だ。
そう簡単に地底から地上に出られるなんて思っちゃいない。

「分かった。これから世話になるよ」

「ふふふ、別にいいですよ。

妹やペット達も喜ぶでしょうしね。
では、早速お部屋に案内しますね」

「ああ、頼む」

青年 & a m p ・少女移動中・・・

「ここが恭さんのお部屋です。」

食事は後で持ってこさせますので」

「ありがとな」

「それでは私は部屋に戻りますが、何かあったら言ってください」

「分かった」

「それでは失礼しますね」

やっとゆつくり休める・・・

と、休みたいけど今はそれどころじゃないな。

少しでも能力の把握とかしとかなないと。

『ありとあらゆる環境、場合に普通に対応する程度の能力』

これが俺の考え通りなら、どんな場所、状況でも生きていけるはずだ。

『普通』っていうのは良く使う言葉だが、これほど曖昧な言葉はないだろう。

何をもって『普通』と呼ぶのか？何を基準として『普通』になるのか？

そんなことは誰にもわからないだろう。

だからこそ、この能力はチートと呼べる。

俺が自分を『普通』だと思い、相手を『異常』だと定義すると、

俺を『異常』にしたり、もしくは相手を『普通』にしたりできるのだろう。

環境。

【この環境で生きていることは異常だ】

そう思った時、この能力が働いて対応する。

自分が【そこで生きているのが普通だ】という風に。

他者の能力。

それを『異常』と認識すれば、それに対応。

【それが効かない】事を普通として認識されるのだろう。

まあ、俺の独自の解釈や定義ばかりだが、これで大体あつてゐるだろう。

つまり、自分の『普通』や『異常』を把握し、即時に考えを入れ替えられれば無敵だつてことだな。

「失礼するよ」。

恭、ご飯持ってきたよ」

と、考え事してたら結構時間たつてたみたいだな。

「食べ終わったら呼んでね。

恭はまだ地霊殿の事よくわかってないでしょ？」

「そうだな・・・じゃあ頼むよ、お隣。

あと、近いうちに案内とか頼めるか？」

「うん、明日にでも旧地獄や地霊殿の案内もしてあげるよ」

「ありがとうな」

さてさて、明日は旧地獄巡りかねえ・・・

4 話（後書き）

何か途中で意味のわからないこと言っちゃってますが、
適当に考えてそれっぽい事書いとした方がいかな？って思ったの
で書きました

例出して説明すると

人は水の中で生きる事は出来ないって言う考えを対応

↓人は水の中でも生きていける事が普通である

人は刺されると死ぬという考えを対応

↓人は刺されても死なない

さとのり能力を使えば心が読まれるという考えを対応

↓さとのり能力を使っても心が読まれない（読めない）

簡単に言つと、常識と非常識を入れ替えたり

普通と異常を入れ替えたり、

自分が普通だと思ったことを出来るって事です。

次話はもう少し詳しい能力説明とキャラ紹介

キャラ説明（前書き）

更新していく予定です

これ書いてるときに4回ほどブラウザフリーズして泣きそうになった

ちなみに一部ネタばれあるかも

恭の能力をありとあらゆる環境、場合、能力に普通に対応する程度の能力にしました。

こっちの方が不自然さがないので・・・

キャラ説明

名前： 武幻 恭 （むげん きょう）

能力： ありとあらゆる環境、場合、能力に普通に対応する程度の能力

年齢： 17歳（幻想入り時） 幻想入り前は高校2年

容姿： 中の中、中の上、いくなれば普通

服装は今は地霊殿で借りた和服を着ている
男物の服がなぜあるとか突っ込んだら負け

その他詳細：

このお話の主人公。

名前の由来は某2525の所でMUGEN動画見て、恭はありふれてそんな名前だったから。

高校2年、そろそろ進路を決めようという時に幻想入りした。

将来の夢も特になく、ただ楽しく生きれば良い、という割と樂觀的な考えの人間。

なので幻想入りしたのが分かった時もすぐに受け入れた。

東方の事は割とよく知っている。

好きなキャラは特にいないが、若干口リコンとかMっ気があったりするので、

そっち方面のキャラに気が向きやすい。

意外と義理堅い。

基本的には友好的だが、知り合いや親しい者を傷つけられたり、貶されたりすると怒る。

その場合は能力を自重なしで使うのでまず勝てない。

能力について：

簡単に言うとな自分の思ったことを出来る能力。（もちろんできない事もあるが

戦闘に関して言えば、ほぼ無敵であり、負けることはほぼない。

例に挙げると、

相手の力が強ければ、それに負けないほど自身を硬く、強くしたり、能力を使われれば、その能力に応じて対応し、効かなくなったり、その能力を使えなくなしたりする。

そして、攻撃面でいえば

神殺しや鬼殺し、不死者殺しなどの、それ専用の攻撃方法などをその場で作り出せる。

つまり、存在そのものが天敵になりうる。

鬼？スキマ？フラワーマスター？ぼっこボコにしてやんよ状態である。

ちなみに応用で相手の能力をコピーすることができる。

（相手の能力に対応するには、

その能力を理解するとか何とかの過程で出来るようになったって言う作者設定）

ちなみに基本的な戦闘スタイルは無手で体術のみを使う。

戦闘以外の能力について：

環境がどれだけ過酷なものでも死なない。

基本的に何が起きても死なない。

寿命もなくせるし、種族も変えようと思えば変えられる。変える予定はないが。

（寿命はなくすけどねえ・・・）

普段は死ぬという事実に対応、不死になっている。

人間やめてる気もするが、人間はやめてないと言い張っている。

技：

基本は他の妖怪や人間が使っていた技をコピーし使う

オリジナル？いいえ組み合わせ技です：

固有結界「絶望の園」：

相手のトラウマを呼び起こし、それを強化して放つ世界を作り出す。さとり、紫、思界の能力の合わせ技

恐れ信仰される鬼の神

名前： 岩洞 無界 （がんどう むかい）

能力： 石化させる程度の能力& a m p・右を操る程度の能力の二つ

年齢： 数万歳（幻想郷最高齢クラス）

容姿： K O F 2 0 0 3 のラスボス、ムカイとほぼ同じ

ただ服が和服になっている。

その他詳細：

鬼神であり鬼の長。

当初は豪鬼を出す予定だったが、能力を考えるのがめんどくさかったため変更。

名前の由来は、岩洞〓岩っぱいもん操ってたし岩の付く名字でいい感じの・・・これでいいじゃん

無界〓ムカイ

っていう安直すぎるネーミング

口調がとってもお爺さん。

普段は人の良いお爺さんみたいな感じだが、戦いになると鬼の本能が荒っぽくなる。

その上、技が周りに大損害を与えやすいので四天王以下の鬼からは大技を禁止されている。

技の説明：

投破：

原作では石投げるだけだったが、この作品は弾幕になっている。
割と凶悪

地衝：

大きく足を振り上げ踏み下ろす。
それで地面から石柱が出てくる。
天子の技に似てるかな？

天衝：

動作は地衝と同じ。
けど上から石柱が降ってくる。
なぜかは分からない。

死戒：

片手で相手を持ち上げ、そのまま石化させる。
そのまま放っておくと石化は解ける。

剛衝：

天地衝と動作は一緒。
違うのは、2本の石柱が地面から出てきて、
そのあとに空からもう一本追加で降ってくる

死界：

能力をフルに使い、周りすべてを石化させる。
死戒と同じで時間がたつと石化は解ける。

絶界：

全力の死界。
石になるを通り越し、砂になる。
範囲も死界より広がっている。

本気で殺しあわないときは放っておいて、石化が解けるまで置いときますが、

それ以外は基本石にしたら碎きます。そう言う設定です。

オリ技や、他キャラの技も使わせたいなー、てか使わせる予定なのでその時は更新します

5 話（前書き）

書いてると、前もって考えておいた物がおかしい事に気づいて
修正してたら原型なくなっで、もう書き溜めなくなっただって言うね・

5話

「ここが灼熱地獄跡、って言っても恭はこの奥にいたんだけどね」

只今、お燐に地底の案内をして貰ってる。

「そうなのか。」

昨日はあまり気にしなかったけど、そんな所で迷ってたんだな」

「普通は気にしないなんて事で済む事じゃないんだけどね・・・
まあそれは今は置いておいて、紹介したい子がいるんだよ」

「ああ、昨日言ってた空って子の事か？」

「そうそう、

ちよっとお馬鹿なんだけど良い子で「おりーん！」ね・・・って、
向こうから来たみたいだね」

「うにゅ？お燐、この人誰？」

「ああ、恭って言ってるね、昨日から地霊殿で泊ってるのさ」

「武幻 恭だ、短い間だと思うがよろしく頼むよ」

「私は霊鳥路れいじろ うつほ 空！お空って呼んでね。よろしくね、恭！」

おお・・・元気いっぱい俺には眩しすぎるよ・・・
俺みたいに色々グスイ事考えてる人間には、その存在は大きすぎる
よ・・・

前からお燐に聞いてはいたが、制御棒とかは付けてないな。
3本の足もないし、胸にあった目みたいなのもない。

服装や姿が違うのは、ヤタガラスを取り込んだときに変わるからか？

それにしても、色々大きいねえ・・・どこがとは言わんが。
いかんいかん、こんなこと考えてたらただの変態じゃねえか
とりあえず話を繋いでいこう・・・喋ったりするのは苦手なんだが
な・・・

「そつえば、ここは何する場所なんだ？
もう地獄と地底は切り離されたんだから使ってないんだろ？」

「切り離されたと言っても放っておいたら暴走するからね」

「だから私が火の強さを調整してるの。」

火が弱くなったらお燐が持ってきた死体を投げ入れて、強くなった
ら天窓を開ける、そんな風にね」

「へえ、そうなのか・・・」

「さて、次は旧都に行って地上に出る手前まで行こうか
言っておくけど、地上には出ちゃダメだよ。

地上の妖怪との約束事があるからね」

「分かってるさ、早く行こうぜ。

お空、仕事頑張れよー」

「うん、バイバイ！」

5 話（後書き）

お空の口調がよくわかりませぬ

原作とイメージをこっちゃんにして2で割った感じの口調を目指してるんですけどねえ・・・

次回はやつとこさ戦闘に入ります
チートっぷりを発揮できるかねえ

追記：旧都と地獄街道こっちゃんにしてたのを修正。

あと、原作は旧都があまり賑わってないっぱい表現でしたが、
うちの作品は賑わってるって設定でいきます

6話（前書き）

戦闘描写を書いてて思った。

俺ほんとに文書くの苦手だなあ・・・

後、結構無理やりに展開持って行ってます

6話

「さあ早く始めようか！酒と喧嘩は生を彩るってね！」

めんどくせえ・・・

ただひたすらにめんどくせえ・・・

状況が分からない？

なら、回想へ 3、2、1、GO！

今より少し前・・・・・・・・

「結構賑わってるんだな」

「そりゃそうだよ。」

地底に居る妖怪達は大体皆ここで生活してるんだから」

やっぱり人間の俺がここにいておかしいよな

「人間なんて食料くらいにしか思っていない奴も多いんだから、あた
いから離れないようにしなよ？」

その方がまだ安全だし、恭は能力持つてるって言うっても人間だしね」

「ああ、分かってるさ。俺も襲われて食われるなんてのはごめんだ」

少年 & amp · 少女移動中・・・

「これで街道沿いの大体の場所は回れたかな」

「そうか、意外と時間かかったみたいだしもう地霊殿に戻るか？
他の場所はまた今度でいいしな」

「んゝ、ならそうしようか。」

あまり遅くなったらさとり様やお空が心配するだろうしね」

「ああ、そうし「ドオオオオオオオオオオン！！！！」・・・あ？な
んだ？今の」

「はぁ・・・多分また鬼の連中だと思うよ・・・
連中、毎日酒飲んで乱闘騒ぎ起こして迷惑してるのさ」

「んじゃ、帰るついでに鎮めるか」

「え、あ、ちょ・・・」

回想終了・・・・・・・・

今思えばなんであんな事言っただろうなあ・・・
疲れた時にうるさくされるとブツンするって感じの心境だったの
かねえ・・・

ちなみに今日の前にいるのは星熊ほしぐま 勇儀ゆうぎ。
乱闘収めに行ったら「あんたが私に勝ったらもう暴れないよ！」っ
て言って、

この状況に持ちこんだ張本人だ。

どんだけバトルジャンキーなのかと。
能力知らない奴からしたら、俺はただの人間なんだがな。

「手加減はしてあげるよ。」

あんたは私の杯から酒をこぼさせれば「いらん」・・・正氣かい？」

「いらんと言ったものはいらん。
そんなことより・・・」

本気で来い。或いはこの身に届くかもしれん」

「戯言を言うんじゃないよ」

そう言っている俺は勇儀の前まで走りこむ。

当然勇儀は反撃してくるだろうが、いつまでも待つのは趣味じゃねえ。

そもそも俺はとつと帰りたいんだ。

「くっ！」

おお、さすがに防御するか、反撃されると思ったんだがな。

けど能力使った時の俺って相手と同じくらいには強くなるんだよね・・・

つまりは・・・

「っがあ!？」

並みの防御くらいじゃ吹っ飛ぶだろうねえ。

とくに勇儀は『怪力乱神も持つ程度の能力』だ。

それもコピーしてるから余計にだろう

「ふう、だから油断なんざするもんじゃないんだよ。
人間なめてんじゃねえぞ?ぶち殺すぞ鬼^{オーガ}」

「・・・はははっ、まさか人間に説教されるとは思わなかったよ。
だけどそうだね。たしかに人間だと思って舐めてたよ」

「さあ、油断もなくなつたところでやり合おうぜ？ここからは本気で来てくれるんだよな」

「当り前さ！行くよ！」

勇儀が突っ込んでくる。
だが・・・

「まあ本気になつたところであんま意味ないんだがな」

そう言つて迎撃する。

ただそれだけのことだ。

それだけで勇儀は再び吹き飛び、起き上がつてこない

何をしたのかつて？

【鬼殺し】の概念を付けて殴っただけだ。

無論手加減はしているから、怪我をしたただけだろうがね。

「ふう、もう勇儀は戦えんだろう？」

一応手加減はしといたけど、早く手当てしてやれよ。あと、もう暴れんじゃないぞ」

そう言つてお隣の所に戻る。

「恭、あんた本当に人間かい？」

「失礼な、まだ人間やめぢやいないよ。」

それよりさつさと地霊殿に戻ろうぜ、疲れたんだよ」

さて、今日はゆっくりと休もうかねえ・・・

6話（後書き）

ということとで6話目、対勇儀戦終了です。

あつさりしすぎですね、はい。

説明：鬼殺し

効果：鬼は死ぬ

そのまんまの意味でとらえてください。

今回は恭が手加減したので死んでないって言う感じの設定です

勇儀の性格がかなり変わってる気がするけどきにしないっ

恭のセリフの元ネタ：

本気で来い。或いはこの身に届くかもしれん。

「言峰綺礼（Fate/stay night）から

命を賭ける。或いはこの身に届くかもしれん。

ぶち殺すぞ鬼^{オーガ}

「アーカード（HELLSING）から
ぶち殺すぞ人間^{ヒューマン}

7話（前書き）

フラグは建設する物、さとりんは愛でるもの

7話

「大体あなたは人間なんですよ？それなのに無茶をされては・・・」

やっぱりやりすぎたのかねえ・・・

朝起きて、さとりに会った途端に部屋に連れ込まれて説教食らってる最中なんだよね。

説教は映姫様の特権じゃないんかい。

でも、なんていうか、新しい何かに目覚めそうな気が・・・

「・・・聞いてませんね？」

ジト目さとりん・・・だと・・・

俺を萌え殺す気がこの人は

「聞いてるさ、一瞬で内容忘れてるけどな」

「それを聞いてないと言っんです。はあ、あなたには言っても無駄でしょうからもついいです。

でもありがとうございます。あなたのおかげで鬼たちはもう暴れないでしょうから」

「ああ、その事なら別に礼なんかいらんよ。俺がやりたくてやったことだ。

それよりこっちこそありがとな」

「へ？なにがですか？」

「心配してくれたんだろ？だからありがとう」

そう言つとさとりは少し赤くなりながら微笑む。

「当り前ですよ。あなたはこいしやお隣達ペットのお友達ですから。」

「そついつさと自身は心配してくれなかったのか？」

なんかね、こついつ感じの子を見るとからかいたくなるんだよ。

「わ、私も心配してましたよ？」

おお赤い赤い。やっぱからかつの面白いな。かわいいかわいい

「あ、あの、あまり頭をなでられるのは・・・」

ん？あ、無意識になでてたのか。

「ああ、すまんね。ついつい撫でちまつてたよ」

「い、いえ、別に構いませんが・・・突然されるとびっくりしますので・・・」

それより今日はどうなさるんですか？今日はお隣は仕事があるので見て回れませんか？」

「む、そうなのか。」

・・・なら情報収集と行こうかね。情報つてのは武器にも防具にもなりうるからな。

妖怪相手に使えるとは思わんが持つてて損はないだろうよ」

撫でながらこんな事言っても格好着かな、うん、やめよう

「あ・・・」

「そんな捨てられた猫みたいな顔するなっ。話が終わったらまたやってやるから」

「そんな顔してません！

それで、情報を集めるにしてもどうするんですか？今なら私が答えられる事なら答えますが」

「じゃあ最近の事とか・・・」

少年 & a m p ・少女対話中・・・

「・・・と言った感じですね」

なんてこつたい・・・

今、さとり聞いた話を整理するところだ。

1・最近地底が地獄と切り離された。

この情報だけでは何もわからなかったが次が問題だ

2・鬼が地底に移り住むようになってそれほどたっていない

この情報だけでかなり昔にきていることが分かる。

たしか、鬼が地上から去り始めたのが原作より数百年も前だったはずだ。

原作開始まで地底に閉じこもるつもりだったが、何百年も居たくはないな・・・

寿命？そんなもん能力使えばどうにでもなるだろ。
そんなことより次だ

3・なんか鬼、てか鬼神が俺を探してるらしい

え？これ死亡フラグ？いや死なんけども、死ぬ気ないけども。

なんでも勇儀はこの頃から四天王だったらしく、それを一撃で倒した俺に興味を持ったようだ。

藪をつついて鬼神が出たってか？何それ怖い
まあさとり心配してもらえたからいいんだけどね。

めぼしい情報はこれくらいかね？

他には、閻魔の十王つてのが全員閻魔王を名乗るようになったとか、是非曲直庁が出来たとかなんとか。

「・・・よし」

「どうかしましたか？」

「ああ、ちよつと外出てくる。地底にも偶には帰ってくるから心配すんな」

「ええ！？ちよ、ちよつと待ってください！

最近地上と地底で決め事が交わされたばかりで「どうせ聞いてんだろ」がよ、出てこいスキマ」へ？」

そついうと空間が裂け、中から人が出てくる。

「やくも ゆかり八雲、紫・・・」

「お邪魔するわよ、地霊殿の主さん。それで、いつから気付いていたのかしら？」

「能力使えば一発でわかるつての。

それより地上に出たいんだがね？俺は一応普通の人間だから許可してくれるよな？」

そう言いながら、紫の能力に対応しておく。
突然能力使われてオワタなんてなりたくないしな。

ていうかおい、そんなに威圧するんじゃないよ。
さとりが小さくだけど震えてんじゃないか。

「・・・たしかにあなたは人間ね。別に地上に出てもいいけれど、
一つだけ約束して頂戴」

「なんだ？」

「一度だけ、私が困っているときに力を貸しなさい。
その条件を飲んでくれたらいつでも地上に出してあげるわ」

「そのくらい別にいいが・・・俺はただの人間だぜ？
俺に何かできるとは思えんけどな」

「嘘をおっしゃい。どこに私の能力が効かない人間がいるのよ。
それで？今すぐに地上に出るのかしら？」

「いや、一度鬼神に会ってから出るとするよ。可能ならやりたいこと
もあるから、
まだ地上に出るのは先になるかな」

「そう、地上に出たくなったらいつでも呼びなさい。
私の能力で地上まで送ってあげるわ」

「ああ、ありがとう」

「それでは失礼したわね」

そついうと紫は再び隙間を開いて帰っていった。

「おーい、さとりー、大丈夫かー？」

「・・・ええ、大丈夫です。少し妖力に当てられただけですので。それよりも鬼神に会うとは・・・何を考えているんですか？」

「ちよつと体術の修行に鬼を借りようかなって思ってたな。

能力に頼るのも悪くないが、不意打ちされた時に反応出来なかったら意味がない」

「なるほど、今から会いに行くのですか？」

「いんや、今日はさとりとまったりしているさ」

「私と、ですか・・・」

「あ？嫌だったか？なら一人で寝てくるが」

「違いますよ、ただ・・・嬉しかっただけです」

・・・恭 side end

・・・さとり side

うれしかった。

『心を読む程度の能力』、そのせいで私は誰からも避けられてきた。最初は心が読めなかったこの人も、今は警戒を解いてくれたのか、読むことができる。

そこには、本心で私と居る事が楽しいと思ってくれていた。

そして、私も楽しいと・・・ずっと一緒に居たいと思っている。

でもこの気持ちは私の心に留めておこう。

この気持ちを伝えようと、こいしやお隣達を裏切ることになりそうだから・・・

・・・さとりside end

7話（後書き）

って事で、さとののフラグ建築と変な設定のお話でした。

ちなみにこの小説の設定のさとは100歳くらいです。
なのでそれほど強くないって設定です。

だから紫の妖力に当てられちゃうんだね、仕方ないね

当面の予定としては、

次話 鬼神&鬼との修行

その次ゝ10話程度 放浪、ときたま地霊殿

さらにその次ゝ 博霊大結界&大結界騒動

原作介入

てのが大まかな流れですかね

では次話、鬼神との修行です

8話（前書き）

主人公ぶっ壊れ気味？

そして鬼神持ぶっ壊れ気味？

8話

「だーかーらー！そこはもっとガアアアアって感じでドオオオオオ
ン！」

って感じだつて言ってるじゃないか！」

「分かんねえよ！？それで分かんと思ってるお前の頭の中が見て
みたいよ！」

「はっはっはっ、だから勇儀には無理だつて言っただじやろうよ。
そういう技術とかは萃香や儂に任せとけていつも言ってるだろ
うが。」

大体は分かつてると思うが、今鬼の集落みたいところに居る。
そこで勇儀、鬼神に体術を教えてもらってたんだが・・・

「こういう感じで、バーン！ドーン！ガン！みたいにさ」

「だから出来ねえっての」

うん、勇儀は教えるのに向いてないよ絶対。
擬音で表現されても分からんっての。

「勇儀、交代せえ、ここからは儂が相手しちやるよ、恭」

この爺さんっぽい口調のが鬼神、岩洞がんどう 無界むかい

・・・どう見てもKOFのムカイさんです本当にありがとっござい
ました

しかも能力も『石化させる程度の能力』と『石を操る程度の能力』

とか・・・

口調変えればいいってもんじゃねえぞ
ちなみに『石化させる程度の能力』を持ったときにおまけで付いてきたのが『石を操る程度の能力』らしい。

「能力も使ってもかまわんぞ。儂も使うからのう。」

その代わり種族殺しの概念は使わんでくれよ？さすがに、儂でも死ぬからのう・・・」

「分かってるつて。じゃあ行くぜ？無界さん」

「いつでも来なさいな、見極めてやろう。」

勇儀、合図を」

「分かったよ、二人とも、準備は良いね？

それじゃあ・・・はじめ！」

「まずは小手調べと行こうかのう」

「ちょ、いきなり投破は・・・うおっ！あぶねえ！」

そうなんだよ、この爺さんマジでムカイさんの技全部使いやがんの。その上に、投破は弾幕レベルの数投げてきやがるから性質悪い。

正直死界やら死戒されたら本気でやらなきゃ勝てる気しねえって。

「ほれ、どうした？もう諦めたのかの？」

「んな訳あるか、よつと！」

石の弾幕をくぐり、無界さんに近寄る。

「ふっ、はっ、せい！」

「ほう、基本は出来ておるんじゃないな。じゃがまだまだじゃよ、若造が！」

足を大きく振り上げ、踏み下ろす。
地衝や天衝と呼ばれる技の動作だ。
今回ののは地衝か

「ぐうっ！？さすがにまともにやり合うときついな・・・」

「当り前じゃろ、能力を制限している人間に負けるほど老いぼれてはおらんわ」

「でも大将って私ら四天王全員とやったら偶に負けるよね」

「死界封印でお前ら全員となんてきついに決まっとうが・・・
むしろそれで偶にしか勝てんお前らが弱すぎるんじゃない」

「まあ勇儀は力押しだもんなー。
さっきだって同じくらいの力にしたら普通にやりあえたし、つと隙ありイ！」

「ある訳無かるうがド阿呆」

「ぐげっ」

痛え・・・なんでよそ見してんのに分かるんだよ・・・

「追撃じゃ、くらっとけ。」

すべてはチリと力す！」

「ちょ、おま、それはなしだろ普通に考えて・・・」

俺の意識はそこで一旦途切れることになる・・・

・・・恭side end

・・・無界side

驚いたの・・・

勇儀は決して力だけでのし上がってきたわけではない。

無論、能力の特性上力が強いのもあるが、それだけで鬼の四天王になれるほど甘くはない。

力の勇儀などと呼ばれてはおるが、戦闘技術もそれなりには高い。

それをこの小僧は勇儀と張り合いおった。

それに加えて、儂の懷まで入り込み、攻撃までしてきた。

「あれは（・・・）本当に人間の器にとどまるのかのう・・・？」

「大将、恭は地霊殿まで運んでおいたよ」

「む？そうか、御苦労じゃったな。ほれ、酒じゃ。お主にやるわい」

「お、ありがとさん、大将。それで、恭はどうだった？面白い奴だろ？」

「ああ、そうじゃな・・・」

勇儀よ、もっと鍛錬せえよ？このままだと能力無しでもあの小僧に負けるぞい」

「なっ！？ただの人間だよ！？それが仮にも鬼の四天王の私より素で強くなるってのかい！？」

「だろうよ。」

もしかすると儂も負けるやもしれぬ。あれには天性のものがあるでの」

いやはや・・・本当にこれからは楽しくなりそうじゃて・・・

8話（後書き）

て事で鬼神との戦いでした。

無界さんは完全にK O F 2 0 0 3 に出てくるムカイさんと同じ感じ
です。

実は豪鬼とムカイさんで迷ってムカイさんにしました。

理由としては、能力を付けるのが楽だったって理由だったり。
だって豪鬼とかどういう能力にすりゃいいのよ・・・

て言う理由ですね。

後でキャラ説明に無界さん加えときます

9 話（前書き）

書き終わる直前でブラウザフリーズからの書きなおし。
そのせいで昨日は書く気が起きなかったんですね・・・
最近は思いつきで書いてたから泣きそうになった

9 話

鬼と戦ったりして数カ月、ずっと闘ったりさとりを弄って遊んだりお隣達ペットと遊んだりした。

こいしは地上に出て行っただのか見てない。

そんなある日、鬼神に呼び出され、今は鬼神と二人で酒飲みながら話してる。

「突然じゃが、儂の娘と戦ってくれんかの？」

「一応理由は聞こうか。」

「うぬ、儂の娘・・・岩洞がんどう 思界しかいというんじゃがな、あ奴は儂以外に負けると言う事を知らんのじゃよ。そのせいとか、思いあがつとる部分があるみたいでの」

「で？俺がそいつと戦って負かして来い、と？その程度なら勇儀や四天王に任せればいいんじゃないのか？」

「あ奴も四天王じゃよ、それも四天王最強じゃ。」

今は勇儀の方が強いかも知れんが、八雲嬢との取引条件があつての、一度地底に入った鬼は地上には簡単に出れんのじゃ」

「あゝ、そーいやそんなもんあつたな。」

って事はその思界つてのは地上に居るのか。なら自由に出入りできる俺が適任ってことか。

まあそれは分かったが、無敗つてのはどういうことだ？」

「能力のせいだな、まだ完全に使いこなせておらんが、使いこなせば儂と同じか、それ以上になるじゃろう。」

あ奴の能力は『想像を具現化する程度の能力』、能力だけでいえばお主や八雲嬢と同じくらい強いじゃろうて」

サーセン、俺のは紫やその問題児の1段か2段くらい上行つてると思うぜ・・・

無界さんには俺の能力の詳細を教えてないから、具体的に何ができるとか分かってないと思う。

能力封じて、さらにコピーまで出来るからな、俺の能力。

「なるほどね、だからちよっと鼻っ柱へし折つて来いと。」

いいぜ、行つてきてやるよ。そいつが居る場所は妖怪の山でいいのか？」

「ああ、そうじゃ。」

天魔も本気でやればあ奴より強いんじゃないが・・・

面倒事になるのが嫌なのか、本気と言つものを出さんからのう・・・

「

やっぱ天魔もいるか・・・

原作じゃ鬼神も天魔も謎だったけど、天魔の方はどんなのかねえ・・・

・

「多分他の四天王も一緒におるじゃろうから、そいつらも頼むぞ」

「へいへい、了解だ」

さて、地霊殿に戻つてさとりと言つてくるか。

少年移動中・・・

「恭？良い所に来たじゃん。ちょっと戦らない？」

「絶対いや。最近のお前攻撃力半端ないもん」

途中で勇儀に捕まった。

「いいじゃんいいじゃん。新技の調整もしたいしさー」

「そういうのは無界さんとやれって・・・」

能力突き抜けてダメージ受けそうだし、お前の新技」

勇儀はこの数カ月で成長した。

・・・というか進化した。成長のレベルを超えてると思う。

俺も無界さんの全力と7割くらいで勝てるようになったが、こいつも1対1で無界さん（死界& amp ;死戒なし）に3割くらいの確立で勝てるようになった。

前まで四天王全員でやっても勝てなかったのにな。

そして、さつきから言ってる新技なんだが・・・

原作では、四天王奥義「三步必殺」なんてスペルがあった、その上位互換らしい。

その名も、秘奥義「一步滅殺」。

三步必殺は一步目震脚、二歩目溜め、三步目正拳突きという感じだったが、

一步滅殺は一步目で踏み込み、そのまま蹴りを放つ。

脚の筋力は腕の三倍あると言っが、普通に殴るだけでも岩を砕く鬼の蹴りだ。

その威力は計り知れない。事実、無界さんもまともに食らったらダウンしてた。

しかも外れても衝撃波が出ると言うおまけ付き。

さらに三步必殺は溜める分、出すのが遅かったが、蹴りなので出が早い。

かなり厄介な技に仕上がってきている。威力が強すぎて手合わせの時には使えないようだが。

「俺は無界さんに頼まれて地上に行かなきゃならんだ。
文句あるなら無界さんに言ってこい」

「うゝ・・・ならいいや、大将に頼もう。バイバイ」

「ああそうしろ、じゃあな」

じゃあ改めてさとの所に行くか。

少年移動中・・・

「そうですか・・・分かりました。
お隣達には私から伝えておきます。
いつでも待っていますので、偶には帰ってきてくださいね。」

「ああ、分かってるよ。ここは俺の二つ目の故郷みたいなもんだからな」

「ふふっ、ではいつてらっしゃい」

「ああ、行ってきます」

そういうと、俺の後ろでスキマが開く

「別れは済んだかしら？」

「丁度終わったところだ。妖怪の山まで頼む」

「分かったわ。こっちよ」

少年&少女？移動中

「で、そんな感じに撃つと面白いだろ？」

「へえ、そんなのもありね・・・」

ああ、着いたわよ。ここが妖怪の山。上まではさすがに登って頂戴」

「おお、ありがとな」

「いえ、いいわよ。面白い話も聞けたわ。
それに、次は私があなを頼るから。それじゃあまた会いましょう？」

「ああ、いつでも頼ってくれ。じゃあな」

そういうと、スキマは閉じる。

ちなみに、移動中話してたのはゲート・オブ・バビロンの事だ。
紫なら出来ると思って話しておいた。次会う時が楽しみだ。

「さて、お邪魔しますよつと」

なにはともあれ山登りでもしようかねえ・・・

少年移動中・・・

「待て！ここから先は妖怪の山、我ら妖怪の住処だ！即刻立ち去れ！」

「そうは言っても鬼神に言われてここに来たんだがね」

予想通り天狗に止められたよ。

無界さんになんか手紙でも貰ってくれば良かったかなあ

「戯言を！立ち去らぬと言つなら力尽くで排除するのみ！」

つておいおいもうちょい話聞こうぜえ・・・？

「待たんかこの猪が！」

おおっ、新しいのが来て止めてくれたぞ。

「申し訳ない、あながら武幻恭氏でよろしいかな？」

「ああ、そうだ」

「なにするんですか！？侵入者ですよ！？」

「お前が何をいつとるかね？この方は鬼神様のお使いでいらつしやつたのだぞ」

「なっ！？も、申し訳ありません！」

「いい、いい。それよりあんたらは？」

「私は天魔の風魔^{ふうま} 雷光^{らいこう}、ほら、お前も早くたって自己紹介」

「俺は大天狗の烏丸^{からすま} 陽炎^{かげろう}です！先ほどは申し訳ありませんでした
！」

おおっ・・・熱血大天狗とクール天魔のコンビかね。
ん？っていうか大天狗？

「なんで大天狗が侵入者の排除に来てんだ？そんなもん烏天狗が白
狼天狗でいいだろ？」

「それはですね・・・」

「あゝ、うん、動けるのが俺と雷光様しかいなかったんだよね・・・
」

「あ？なんで？」

「・・・思界様ですよ」

「あの方が毎晩宴会を開く上に俺達と手合わせをしろって要求して
くるんですよ」

「それで私と陽炎以外は動けない状態ってわけです」

「なるほどな・・・こりゃ一服する暇もねえかな。
とりあえず思界の所に案内してくれ」

「その必要はないよ」

声がした方向、そこには・・・幼女？
鬼の幼女は萃香だけで十分だぜ・・・

「お前が思界・・・か？」

「そうだよ、親父に私と戦えって言われたんでしょ？
早く始めましょ、人間なんかと戦うのは趣味じゃないけどね」

ほほう・・・これはこれは、随分調子に乗ってるねえ・・・
叩き潰すか・・・

「いいぜ、場所を変えようか。ああ、移動する必要はない」

そういつて俺は能力を使う。

紫の能力を使って結界を張り、無界さんの能力でステージを作る。

作り終わると、どちらからともなく向かい合う。

「人の持つ可能性とやら、見せてもらおう」

「では教育してやろう」

9 話（後書き）

ちよいと変なところですが、切りです。

勇儀の技に関してですが、適当です。

調べても弾幕以外の情報出てこなかったので三步必殺は正拳突きにしました。

一步滅殺については、殴るよりも強い生身の打撃技・・・蹴り？って感じで思いついたんで、そうしました。

オリキャラ3人追加ですね。

後々キャラ説明に追加しときます

そしてゆかりんが地味におかしなことになりそうなヨカーン

セリフ元ネタ：

人の持つ可能性とやら、見せてもらおう＝マガキ（KOF）
そのまま引用

では教育してやろう＝アーカード（HELLSING）
そのまま引用

10話（前書き）

戦闘ムズイ

10話

「ほれ、どうした！これくらい無界さんもやってくるだろうが！」

「なんであんたが親父の技使えるのさー！？」

うん、実に面白い。

今の状況を説明すると、

逃げ回る思界・追いかけまわす俺（投破しながら）・それを白い目で見守る天狗

になる。

・・・完全に俺変態じゃね？

いやいや、無界さんに頼まれたんだから仕方ない。うん。

「ああ、もう！風よ！水よ！いつけー！」

おおつ、急に風が吹いて水がわいて出た。

面白い能力だなー。

「だが無意味だ」

攻撃が直線的すぎてよけ易い。

なるほど、能力だけで四天王になったつてのも頷ける。

「っ！なら、これはどう！？」

今度は火の玉の弾幕か。

「だから甘いつての」

「あんたに当てるのが目的じゃないわよ！」

「っ!？」

ほう・・・

火と水で霧を作って視界を封じるか・・・

さらに能力で作ったのか、人型の影がいくつも見える。
訂正だな、戦闘センスもある。

「けどなあ、これくらいじゃまだまだだなあ」

「ならこれはどう？爆裂落花星！」

「不意打ちつてのは声を出さずに気配を殺してやるから不意打ちつてんだぜ？」

声出してるんじゃないや避けてください、って言ってるようなもんだ」

上から巨大な岩が降ってくるが、飛びあがり避ける。

岩が地面に落ちるその瞬間・・・

「吹きとべ！」

岩が爆発した。

なるほど、だから「爆裂」落花星ね。

飛んでくる石や岩を結界で防ぎながら思考する。

たしかに能力と戦闘センスはある。が、経験が足りない。

恐らく実力が上の者とはあまり戦ってないからだろう。

そもそも実力が上の者なんて四天王、鬼神、天魔くらいだろうが。

ついでに面白い事を思いついたので試してみよう。

「よし、大体お前の実力は分かった。

これからやるのは実験だ。危険だと思ったらすぐに逃げろよ?」

「はっ、誰が逃げるか!叩き潰してやる!」

おお怖い怖い

で、今からやろうとしてるのは固有結界もどきだ。

その名も、「絶望の園」。

さとりと紫と思界の能力が使える俺だからこそ作れる領域だろう。

「・・・よし、出来た。

トラウマを呼び起こせ!

発動、「絶望の園」

その瞬間、周りすべてが石に囲まれた世界に変わる。

「あ……あ……噓……」

おお、思界が泣きそうな顔になってるな。

まだ発動したただけなんだがな。

天狗二人はきよろきよろしてる。景色が変わったことに驚いているんだろ。

「思界、何をしておる」

お、無界さん登場か。

ということは、思界は無界さんが苦手なのか。

「おや……じ……」

「貴様、遊び呆けておるからこうなるのだ！反省しろ！」

そういうと、無界さんは手を広げ……ってあれ？あれ死界のモーションじゃね？

……まあいいか、死界くらいならだいじょ……

「すべてはムとカエる！」

ちよええええええええええええええええ！？

絶界ですか！？さすがにそれはやばいつて！？

「固有結界解除！あと思界と天狗の二人の周りに干渉遮断結界！」

絶界ってのは死界のさらに強くなったverだ。
正直、俺でもまともに食らったら死ぬ。多分。
死界はまだ石から戻るっていう救いがあったが、絶界にはない。
そもそもからして、石化を通り越して砂になる。

「・・・ふう、やっと終わったか。

固有結界解除してもしばらく能力が続くのは改良の余地があるな。
で？まだやるか？思界よ」

「・・・え？親父は・・・？」

「あれは俺が作った幻影みたいなもんだ。
ん。怪我は・・・脚にちよつと食らったか」

さすがに即席の結界では防ぎきれなかったようだ。

「ちよつと我慢しろよ」

「え、きゃっ！」

俺は思界を抱き上げ、天狗の二人の所まで行く。
なんか思界が騒いでるが気にしない。

「そこのお二人さんよ、こいつを頼むぜ？脚にかすったみたいで動
けないだろう。

俺は周り直してか様子見に行くから」

「は、はい分かりました・・・」

なんか委縮してる気がするが気にしない。

陽炎が思界を担いで飛び去っていく。
雷光はこっちに残っている。

「さっきのは・・・」

「ああ、あれは「絶望の園」って技だ。さっき作った」

「さっき作ったって・・・どういことですか？」

「簡単だ。俺の能力の応用で思界の能力をコピーしてな？
他の、境界を弄る能力を使って簡単な世界を作り上げたんだ。
心を読む能力で相手のトラウマを呼び出し、それを強化して放つ
て感じの世界をな」

「それはなんとも・・・恐ろしい技ですね・・・」

「まあしばらくは強さの調整をしなければならんから、使えんだろう
がな。」

それより早く帰って休んだ方がいいぞ？ 結界張ったとはいえ、完全
には防げてないだろうからな」

「はい、申し訳ないですがそのようです。」

私はこれで失礼しますよ」

「ああ、また明日にでも来させてもらおうよ」

「お待ちしております」

そっいつて雷光も飛び去っていく。

さて・・・この惨状どうしよう・・・

10話（後書き）

はい、短いですが終了です。

戦闘ムズイよー

初めて恭に技らしい技の登場ですかね。

技の説明：

爆裂落下星：

巨大な岩や、その他の塊を作りだし、上空から落とす。
地上付近に近付くと、爆発し破片を周りにばらまく。

固有結界「絶望の園」：

相手のトラウマを読みとり、それを強化して放てる世界を作り出す。
いうなれば、さとの上位互換系の技。

・・・コピーしただけじゃなく、強化も出来るとかちょっとSYれな
らんしょ・・・

11話（前書き）

また戦闘でござる。そして自分でもよく分からなくなってきたでござる

11話

・・・思界side

「はっはっはっ、あんたが大将以外に負けるとはねえ！」

目の前の鬼・・・伊吹萃香^{いぶきすいか}が言う。

あんなの、あいつが変な事したからだもん！

「負けてない！あれは親父に負けたんだ！」

「でもそれも雷光が言うには、そいつの能力なんだろう？
なら諦めちまいなよ。能力も使ってこそその真剣勝負だろう？

事実、あんたとそいつは能力を使って、あんたが負けた、それだけだよ」

「それでも！あれは親父に負けたんであって、あいつに負けたことにはならない！」

そうだ、たとえ負けたとしてもあれはあの人間の實力じゃない。
親父が出てきたから負けたんだ。

「ふう、ならもう一回やるか？」

・・・思界side end

・・・恭side

「ふう、ならもう一回やるか？」

まあこうなりそうな気はしたんだよな！。

鬼・・・というか、こういう性格の輩はちゃんと真正面から負かさないで負けを認めない。

地底でも、こういう性格の鬼に絡まれて、さとの能力で撃退したら「卑怯者が！正々堂々戦え！」って言って、また襲ってきたもんなあ。

「いい度胸してるじゃん。今度こそあんたをぶっ潰してあげるよ」

「おい、思界・・・すまないね、こんな面倒くさい奴で」

ん？思界の奥に居るのは萃香か。

「いや、いいさ。元と言えば俺が正面から叩きのめせばよかったんだ。

それより、君は鬼の四天王、伊吹萃香でいいか？」

「ああ、そうだよ」

「無界さんに他の四天王も頼むって言われてるからな。お前も覚悟しとけよ？」

笑いながらそう言う。

「へえ、大将にねえ・・・ま、せいぜい期待しておくよ」

ほう・・・それは全く期待していない言い方だな？おい？
やる時はO S H I O K Iがいるかあ？

「ちょっと、無視しないでよ。」

それで？やるのは別にいいけど、どこでやるの？」

「ここでいいだろ。結界さえ張ればどこでも一緒だ」

「分かった。じゃあ早く結界張りなさいよ」

ここまで高圧的な態度取れるのはもう脱帽もんだな。

ちよいと慢心がすぎるんじゃないかね？仮にも一回お前を倒してるんだがな。

慢心がすぎれば、どれだけ優位でも負けるんだぜ？どこぞの慢心王みたいにな。

「よし、もういいぜ。始める前に一つ言っておこう。俺はこの戦いじゃ“あれ”は使わん。」

「いいわ、そんな事なら後悔させてあげる！爆裂落花星！」

いきなりそれですかい。

「無駄だね、そいつは不意を突いて、しかも初見でこそ最高の効果を発揮するもんだ」

そういうと、俺は飛びあがり回避する。

「こんどはこっちの番だぜ？はあ！」

降下するスピードを利用してのどび蹴り。

「そんなの当たらない！」

「だから先の行動を読めつての」

当然、当たるはずもなく、後ろに下がり避けられる。

着地した後、クラウチングスタートの要領で飛びだす。

当たり前だが、クラウチングとスタンディングではクラウチングの方が早い。

なぜなら、地面からの反発力が水平方向、つまり進む方向により強く発生するからだ。

つまりどういう事かと言うと・・・

「ぐっ!？」

予想していたよりも早い追撃に咄嗟の防御で体制を崩す思界。しかしさすがは鬼の四天王か、すぐさま立て直し、反撃してくる。

「なるほど・・・さすがに親父が認めるだけはある。でもその程度で負けはしない!」

そう言うと、勢いよく突っ込んでくる。

だから直線で・・・き・・・え？

「さあ行くよ! 似非萃香軍団!」

「ちょっと待て! それなんだ! 一匹くれ!」

「あんたが何言ってるのさ! 思界も何してるのさ!」

だって小さい萃香がいっぱいだぜ? いっぱいなんだぜ!?

「なんつー凶悪な技を・・・」

「どうだ！越えて見せろ！」

どうしよう・・・あれ（・・・）に手を出すのは嫌だな・・・
しょうがない、ちよつと本気出すか。

「んゝ、このくらいかな？」

そう言つて俺は結界を発動させる。

ちよつとちび萃香を包み込む形の物だ。
これでちび萃香は相手しなくてもいい。

「むう、無効化されたか・・・」

「あれでなんとかできると思つたお前に感動するよ」

「ま、冗談は置いといて、次のは本気だよ？」

奥義「無間地獄」！

ふむ、空間が歪んできてるな・・・
無間地獄・・・たしか地獄の一種で大罪を犯した魂が絶え間ない痛みを受け続ける地獄だったか。

たしかに、さつきからチクチク痛いな。

「・・・なんであんな平気なのよ・・・」

「ま、俺は色々と普通で異常だからな」

「普通なら発動した瞬間にもだえ苦しんで死ぬほどの痛みよ!？」

そんなのは案外関係ないんだよねえ。

本物と違って痛みを与えるだけみたいだし。
痛みに対応すれば関係ないし

「ま、いいか、とりあえず呆然としてる君にこれを送ろう。
今のところの俺の体術の奥義って言っていい技だ。感謝して受け取れ。」

回転百花・灼熱」

回転百花・灼熱。

簡単に言つと、霊力やら妖力やらで強化した拳で殴り続ける。

そうすると摩擦やらなんやらで燃える。それだけの技。

ただ、速さだけなら鬼神と張り合える俺の拳だ、すさまじく痛い（らしい）

「な、きゃああああああ」

おお、最後は随分と女の子らしい悲鳴だったな。
それではこの戦いは終了といたしましょうかねえ。

その後。

「分かったわよ。これからはちゃんと鍛錬するし、怠けないし、慢心もしない」

「それでいい」

「で、恭？って言ったっけ。勇儀がなんかすごい事になってるって聞いたんだけど？」

「ああ、あいつ、思界より強くなってるぞ。」

「ていうか、鬼神並みに強くなるのも時間の問題じゃないか？」

「はあ！？あいつそんなに強くなってるの！？」

「勇儀も目標があればそこに突っ走るって性格だからねー。そうなるのも分かる気がするよ」

「そついや萃香、お前も俺とやるか？」

「いんや、いいよ。さすがにあんたとはやっても勝てそうにないや。本気じゃない上に、半分も出してないでしょ？」

「え？本気じゃないのは分かってたけど、半分以下であれなの！？」

「まあ、そうだな。本気でやれば無界さんでも勝てるし」

うん、前に無界さんと戦って7割くらい勝てるって言ったけど、あれ能力使ってないんだよね。

だから能力使えば普通に完勝できちゃうんだよ。

この理由は、成長の限界を対応してなくしたんだよね。

人って成長速度は速いけど、限界も低いから、それさえ無くせば恐ろしい速さで成長する化け物の出来上がりなんだよ。

まだ人間やめたつもりないけど。

「・・・ほんとに人間？親父に勝てる人間なんて知らないよ」

「そりや普通は勝てんわな。そもそも無界さんが能力使った時点で大抵は死ぬがな」

「ほんとに異常だねえ、あんた」

うるさい、ほっとけ。

「むう、じゃあもういいか、そろそろ山降りるかな」

「もう行くのかい？もうちょっとゆっくりしていきなよ」

「仮にも人間なんでね、人里で過ごしたいんさ」

「鬼神を下す人間なんて聞いたこと無いけどね」

「そんなもん気にしちゃいかんつての。じゃあな」

「うん、またねー」

「今度会った時は勝ってやるから覚えておきなさいよ！」

威勢がいいねえ・・・

ま、こういう時は振り返らずにクールに去るのが良い男ってね。

11話（後書き）

なんかまた色々無茶した気がする。

ほんとに戦闘のラスト、天の鎖から天地乖離す開闢の星（エマヌエルキドゥ）をコピーした思界の能力で複製、トドメって感じでやりたかったんですが、体術で決着付けた方がいいかなと思い、こうなりました。

技説明：

奥義「無間地獄」：

思界の奥義であり、最後の切り札。

無間地獄とは、絶え間ない苦しみ（剣樹、刀山など）を与え続け、他の地獄が夢のような幸せと思えるほどの苦しみだという。

その痛みを常に与え続ける空間を創造した技。

さすがに痛みを再現するのが限界だったようだ。

回転百花：灼熱：

超高速打撃。

すさまじい速さで放たれる拳は摩擦によって燃える。

それほどまでに速い打撃と、摩擦による発火によって相手を倒す技。

なんかこう見ると恭って地味だねえ

12話（前書き）

さてさて、そろそろ物語を進めていききたいですねえ

12話

「結構人多いのな」

「そりやそうですよ。幻想郷の中心って言っても過言ない場所ですから」

今、俺は人里に来ている。横になんかパパラッチがいるが。

まだカメラが出来てないからパパラッチではないのか？どうでもいいが。

名を射命丸^{しゃめいまる あや}文。原作では文花帖やダブルスポイラーで有名な烏天狗だ。

天魔に人里に行くって言ったら護衛と言うなの道案内を押しつけられた。

「それより小腹すきませんか？お勧めの団子屋が・・・」

「行かんぞ。そんなに金も余裕ないんだ。とりあえず稗田と上白沢って人の家だな」

聞いた話だと、慧音はもうここにいららしい。

ってことで会いに行ってみたい。

それに稗田は数年前に6代目稗田^{ひえだのあむ}阿夢が生まれたらしい。

なのでついでに幻想郷縁起も見せてもらおうかなという魂胆である。

「ちょっとくらい良いじゃないですか・・・それにしても《御阿礼の子》に《歴史食いの半獣》ですか。どういった御用で？」

「稗田の方は幻想郷縁起を見せてもらおうと思っとな。」

上白沢の方はここ最近の歴史だな。地底である程度は聞いたが、如何せん地底では最新の情報と言うものが手に入らないからな。だからそっちの専門家に聞こうと思っとな」

「なるほど、そう言えば恭さんは地底からいらっしやっただけでしたね。」

ああ、稗田の家はあそこですね」

雑談しながら歩いているうちに、着いたようだ。
使用人らしき人が門の前に立ってるな・・・

「すいません、こちらが稗田家で合っていますか？」

「うん？ああ、そうだ。何か用か？」

「ええ、ちょっと幻想郷縁起を見せてもらえないかと思ひまして」

「ほう、ちょっと待て。阿夢様にお見せしていいか聞いて来よう」

「お願いします」

「・・・恭さんって、そんな喋り方も出来たんですね・・・」

「よし、お前は俺の事をどう思ってたのか洗いざらい吐いてもらおうか？」

少年 O H A N A S H I 中・・・

「了解が取れたぞ・・・そっちの天狗は大丈夫なのか？」

「大丈夫でしょう、少しO H A N A S Iしただけですし」

「恭さんの鬼・・・」

「おいおい、俺をあんな戦闘狂と一緒にしないでくれ。それより早くいくぞ」

そう言つて俺は文を担ぎあげる。

まあなんかうめいてるけどほっときや直るだろ。うん。

ていうか広いな。こりや案内ないと迷子になりそうだ。

「ようこそいらつしやいました。私が稗田家当主、稗田阿夢と申します」

「これはご丁寧に、私は武幻恭と申します。以後お見知りおきを」

「だから恭さんにその口調は似合わない・・・ふぐう」

ん？なんか聞こえたかなあ？俺のログには何も無いな

「ふふふ、気楽にしてくださいって結構ですよ。

それでは書庫のほうにご案内しますね」

「ああ、分かった、頼むよ」

少年& a m p・少女w i t h烏天狗移動中・・・

「こちらになります。御用があればお呼びください」

「ん、ありがとう」

「恭さんが読み漁っている間私はどうすれば・・・」

「天狗さんですか？良ければ幻想郷縁起に載せたいのでお話を聞かせてもらえるとうれしいのですが・・・」

「あ、はい、分かりました。私でよければお話しますよ」

「ことで、各々やる事は決まったみたいだな。」

「じゃあ俺はゆっくり読ませて貰いましょうかねえ。」

少年読書中・・・

ふむ、色々とためになる事が書いてあったな・・・

ここら辺一帯の妖怪の勢力図だとか、その妖怪の能力だとか、対処法だとか。

知ってて損はないと言うレベルのものばかりだったか。

「失礼します。・・・あら？もう読み終わったのですか？」

「ああ、結構流し読みだったけどな。まあ大体必要な情報は分かったよ」

「そうですか。所で、射命丸さんに聞いたところ、鬼神の娘に勝ったとか・・・」

「ん、そうだな。ちなみに鬼神にも勝ってるぞ、手合わせだが」

「なんと・・・！良ければ詳しくお話をお聞かせ願いたいのですが？」

「いいぞ、ま、答えられる範囲でよければな」

少年応答中・・・

「・・・ありがとうございます。」

しかし、あなたは本当に人間ですか・・・？能力だけならともかく、身体能力までも鬼神を上回るなど聞いた事がないですよ」

「そりゃな、そんなもん一部の能力を持ってないと無理な話だ。

俺の場合は成長の限界と言うものをなくした。そして少しだけだが成長の速度を上げた。

まあ新陳代謝や回復力を高めるのと同じ要領だな。

それを繰り返し繰り返しやって、唯ひたすらに強さを求めただけだ。幸運にも身近に鬼を始めとして、練習相手にも困らなかつたしな」

「それは分かりましたが、なぜそこまで強くあろうと思うのですか？ただ生きていくだけなら、そこまで貪欲に強さを求めずとも良いはずですが」

「・・・まあ、そうだな。

だけどさ、俺ってさ、基本的に負けず嫌いなんだよな。

最初は生きていくためだったはずなのに、いつの間にか鬼神に勝つ事が目的になった。

それに、地霊殿の皆や、俺の大事な奴らを守りたいって思うのもいいじゃねえか。男ってのはそういうもんだ」

まあ、他にも理由はあるが今は良いだろう。

「男の浪漫・・・ですか。良い話を聞かせていただきました。

もう良い時間ですし、お礼に今夜はうちに泊まって行ってくださいな」

む、もうそんな時間だったか。

「じゃあお言葉に甘えて今日は泊らせてもらつよ」

「はい、お部屋に案内いたしますね」

はて、何か忘れてるような気がするが・・・
まあ気のせいだろうよ

「恭さん・・・いつまで待ってればいいんですかー！？」

後から聞いた話だと、その日文も泊めてもらい、次の日に山に帰ったようである

12話（後書き）

俺はいつたどこに向かっているんだ・・・
てことで稗田家編でした。

阿夢は調べたら出たので、それを使っていますが、公式なのかな？よく知りません。
ならなぜ使ったし

次かその次くらいに求聞史紀風？の紹介文書きたいです

ちよいとお知らせです。

作者は高校生なのですが、もうすぐ中間テストという地獄があるので、更新が遅くなります。

できれば二日に1話、遅くても4日に1話程度は投稿すると思いますので、今後ともよろしくお願いします。

幻想郷縁起（前書き）

これ書き終わった後、前のキャラ紹介は削除しようかと。

技説明は・・・あとでどっかに追加しますん

阿求の代の幻想郷縁起って設定なので、色々ネタばれあるかも

幻想郷縁起

すべてを超えた普通の人間

名前 武幻^{むげん きょう}恭

能力 ありとあらゆる環境、場合、能力に対応する程度の能力（*1）

危険度 高

人間友好度 極高

主な活動場所 地底、人里

約500年も前から生きている、人間である。

誰にでも親しみやすく、友人には鬼神や天魔、さとり妖怪に龍神といった者までいると言う。

口調は多少荒っぽいが、真面目にする所ではきちんとした口調にするなど、使い分けているらしい。（*2）

過去に何かあったのか（*3）、強さを求めるあまり、龍神をも打倒してしまった何とも破天荒な人間である。

能力については、彼曰く「すべての生物にとっての天敵」になりうる能力らしい。なんでも、すべての生物には弱点や苦手とする攻撃があり、それを瞬時に出来るとのことだ。その他にも、能力を複製し、自分の力として扱ったり、それを組み合わせたりなども出来るようだ（*4）。

戦闘方法は主に体術を使い、武器は使わない。武器を使わない理由としては、本気で殺す時にしか使わない、らしい。霊力や妖力も使い、身体能力の強化や、牽制にも使うようだ。

目撃証言

「あの方は、私の大切な人です・・・」（古明地さとり）

どうやら地霊殿の主と親密な関係にあるようだ

「殴り続けてれば勝てる（*5）って言うけど、ありゃ勝てる気がしないねえ」（星熊勇儀）

あの人は体力もすごいですから・・・

「さとりさん達地霊殿の人達を取材した時は死ぬかと思いました・・・」（射命丸文）

親しい人を大切にしている分、それを邪魔されると激しく怒るようだ。

「偶に来て寺子屋を手伝ってくれるから助かってるよ」（上白沢慧

音)

基本的には良い人のようにだ

対策

彼の親しい人間には手を出さない。これに限るだろう。殺生をを好まない彼は、もし手を出すといつかの異変の再来となるだろう。

*1…いまいち定義が曖昧らしいが、基本的になんでもできるらしい。

*2…似合わないなどと言ってはいけない。肉体言語で語られる。

*3…何があつたのかは詳しく語られてはいない

*4…最近よく使う能力はスキマ妖怪のものだとか

*5…防御だけは人の身を出ていないらしい

本人曰わく、「能力や種族に対する耐性はあるが、防御は上げていない」とのこと。どういうことだろうか

13話（前書き）

あきゅんキャラ崩壊。

どうしてこうなった・・・

13話

「ごちそうさま」

「お粗末さまです」

昨日阿夢の家に泊めてもらった俺は、朝飯を食って、食後にお茶を貰っているところだ。

正直こんな良くしてもらってもいいのかとは思う。が、口には出さない。

「それで、恭さんはどこへ行きたいのですか？」

「ん？ああ、上白沢の家かな。とりあえず、妖怪の事は幻想郷縁起で大体分かったし、最近の情勢とかをちょっと知りたいしな」

ついでに妹紅も幻想入りしてるのか聞いてみるつもりだ。

話してくれればいいし、話してくれなくても、なんか情報がつかめれば良しだ。

「よし、一服もした所で早速行くか！」

「ああ、今日の案内は私がやりますので、先に玄関の方に行ってください」

「おう、分かった」

念のため言っておくと、一応玄関の場所くらいは把握してる。

キングクリムゾン！時間は消し飛び、着いたと言う結果だけが残る！

「ここが慧音先生のお宅ですね」

ふむ、寺子屋ももうやっているようだ。家の横にそれらしき建物がある。

寺子屋って江戸時代に広まったはずなんだが・・・細かいことは考えるだけ無駄か。

「慧音さん？少しお邪魔しますよー」

と、そんな事を考えてたら阿夢が勝手に入って行った。

お前それでいいのか・・・？

「ああ、阿夢か、いらっしやい。おや、そこにいるのは誰だ？」

「最近こつちに来た武幻恭だ、よろしく」

「上白沢慧音、ここで寺子屋というものをやっている。今日は何の用かな？」

「少し聞きたいことと頼みたいことがあってね」

「分かった、話を聞こう。上がってくれ」

そう言つて慧音は俺を部屋へと案内する。

案内された先には阿夢がいたが・・・ほんとに俺にはお前さんの性格がよく分からんよ

いつの間にここにいたんだ。

「まあ座ってくれ。それで、聞きたいこととはなんだ？」

「ああ、最近の大名の動きを教えてください。

ここは外の情報が入って来にくいだろう？だからこつこのは貴女に聞くのが一番だと思つてな」

そつ、今の幻想郷は結界こそ貼られていないが、ほとんど外の世界と隔絶されている。

その理由として、紫が流している「幻想郷は妖怪の樂園である」という噂が最大の理由を占めているだろう。

退魔師を除いて、よつぼどの物好きでない限りそんな場所には来ない。

そして、そういった物好きや退魔師といった連中は人里の守護者である慧音の所に来る。

だから必然として外の情報はここが集まりやすいのだ。

まあ昨日阿夢と話して知つた事なのだが。

「ふむ、大名の動きか・・・」

最近に関ヶ原の戦いで、徳川家康を総大将とする東軍が石田光成ら

の西軍に勝利したり、東軍の総大将だった徳川家康が江戸幕府を開いたりといったことを聞いたな。

それに、肥前の国の平戸では和蘭との貿易が始まったとも聞いた。私が知っている最近の事はこのくらいだ」

ということは、1600年代前半ということか？

たしか江戸幕府が開かれたのが1603年、オランダとの貿易が始まったのは少し経ってからだったはずだ。

こんなことなら歴史をもう少し勉強しておけばよかった・・・

ていうかおいこら阿夢、お前は寄りかかってくるな、お前の人物像が崩れてきそうだよ

「ありがとう、大体知りたいことは分かったよ。

次に頼みたいことがあるんだが、いいか？」

「内容にもよるが、私にできることなら手を貸そう」

「小さくてもいいから、空家か空き地はないか？」

「住む所を探しているのか？それなら里の端に空家があったはずだ。それを使うと良い」

「ありがとう、ついでにもう一個。人里の守護つてのは貴女一人でやってるのか？」

「いや、もう一人妹紅というのが手伝ってくれるし、人里にも退魔師はいる。

それに妖怪の賢者との取り決めで、めったに人里には妖怪は攻めてこないよ。

だから安心して暮らすといい」

ふむふむ、妹紅もいると。

それに、人里にそれほど戦闘出来る人間がいるなら大丈夫か。原作通りに進むってわけじゃないし、そもそも原作より昔の今は何が起こるか分からんから心配だったが、慧音に妹紅、それに退魔師もいるならたとえそこらの妖怪が攻めてきても大丈夫だろう。

「ありがとう、あまり家にいないと思うが、一応拠点は持っておきたかったからな」

「ん？家にいないとはどういうことだ？」

「ああ、幻想郷を見て回ろうかと思ってね。それで一応拠点だけは持っておきたかったんだ」

いちいち地底に戻るのはめんどくさいからな。

「幻想郷を見て回るって・・・正気か！？妖怪がそこかしこに居るんだぞ！？」

「あ、慧音さん、大丈夫です。この人、鬼神でも殺せませんから」

阿夢さん、今まで空気だったのにここで出てくるんですか、そうですか。

「なっ！？どういうことだ？」

「簡単。俺が強いつてただけだ」

「・・・はあ、それだけで鬼神に殺されないならどれだけ楽だと・・・」

なんか疲れてるっぽいな。

・・・俺のせいじゃない、うん、多分。

「ま、まあ里の端の家は自由に使ってくれ。里の皆には私から言うておこう」

「色々とすまん」

「いいさ。里に居る間は私たちに手を貸してくれればそれでいい」

「そのくらいならお安い御用だ。じゃあ世話になった。俺はお暇するよ」

「私も失礼しますね」

「ああ、ちよつと待て。これが家の場所だ。じゃあまた暇なときにも来てくれ」

「ん、ありがとう」

慧音に見送られ、俺たちは教えられた家の場所へ向かった。

ていつか阿夢さんや、ほんとにどこまで着いてくるつもりだ

13話（後書き）

短いですがここまで。

次回は少しキンクリします。

14話（前書き）

ちよつと100年ほどキンクリ。

飛ばし過ぎたかな・・・

そして予定を変更、オリジナルの異変っばいなにかと設定をぶち込んでみました。

守屋を守矢に修正しました

14話

慧音に家を貰い、人里で暮らし始めてから100年ほどが経った。あれから10年ほどで幻想郷ほぼ全体を見て終わり、それから偶に地霊殿に戻ったり、妖怪の山に行ったりして、平和に過ごしていた。

原作キャラとも結構出会えた。といっても、紅魔館組、永遠亭組、守矢神社組、命蓮寺組はまだ幻想郷に来てないのであつてないし、風見幽香には会いに行っていない。行ったら殺し合いになりそうだし。

阿夢は30歳で亡くなった。と言っても、ちよくちよく映姫に会うついでに会ってくるのでさほど悲しくはない。

映姫には会ったびに説教されるが、まだ俺にとっては可愛いものを愛でる感覚なので苦ではない。

それを言くと落ち込むが。

鬼達は、さらに凶悪に強くなっている。特に、思界はもう無界さんと並んで立てるほどの強さにまで成長した。勇儀や萃香も恐らく原作より強くなっている。ただ、もう一人の四天王にはまだ会えていない。能力のためか、こいしよりも見かけない。俺の能力は相手を一度見ないと、発動できないので見つけようがない。まあ適当に過ごしていたら見かけるだろうと思って、探すことは諦めている。

紫は龍神との土地の交渉に四苦八苦しているようだ。もうすでに何回か断られているようだが、それでも諦めずに何度も交渉しに行っている。

紫には、「本当にダメだった場合、龍神を力で屈服させる」と言われているので、もうすぐ呼ばれるかもしれない。

人里の皆は俺や慧音、妹紅などの特殊な人以外は世代交代している。やはり人が死ぬというのは悲しいものだ。だが、それが人というものなので、仕方ないと思う。

初めて親しくしていた人が死んだ時は、さとりの胸を借りて泣いたものだが。あの時は、後で恥ずかしさでまた泣きたくなった。さとり、「人が死ぬというのは自然の理です。それを悲しむというのも当然のこと。だから今は我慢せずに泣いてください」と言われたのがすごく胸に響いた。

地霊殿の皆はいつもと変わらない。しいていえば、さとりとの仲が少し進展したというくらい。どう進展したかとは言わない。

こいしは相変わらず神出鬼没で、お隣とお空はいつも仲良くしている。それをさとりと二人で眺めてなごんでいる。

いつかはさとり達を地上に出して、一緒に暮らしたいと思っているのだが、無理だろうか……

いつか紫に頼んでどうにかできないか聞いてみよう。

この100年間はこんな感じだ。

さて、ここから始まるのは、俺が幻想入りしてから初めて出来た家族達を狙われた、そして、生涯初かもしれない、本気で切れたときの記録だ……

「あ？悪魔？」

「というより、墮天使かしら。ソロモン72柱の一人がこっちに来ようね。気をつけなさい」

今、俺は地霊殿の自室にいる。

そして紫が言うには、最近地獄（罪人が裁かれるという意味の地獄ではなく、世界としての地獄）の中の悪魔の一人、というか、ソロモン72柱の一人がこっちに出てきているらしい。

・・・やばくね？

悪魔つつたら妖怪よりも上位の存在のはずだ。神にすら及ぶ力量を持つ者もいる種族だ。

代表的な所でいえば、ソロモン72柱、ルシファー、ベルゼブブなどがいる。

下位の悪魔ですら、小妖怪、下手したら中妖怪も負けるかもしれん。そんなもんが幻想郷に出てきてるなんざ存在レベルの危機といっても過言じゃないだろう。

「私は悪魔の居所を探すわ。見つけ次第貴方に知らせる。
悔しいけれど、上位の悪魔だと貴方以外に勝ち目はないわ」

「ああ、分かってる。いくら紫や鬼神でも悪魔相手はきついだろう」

それに、俺もこの100年で成長している。

恐らく、龍神は分からないが幻想郷では最強と呼べるだろう。

一応能力とかなにもなしで殴られ続ければ負けるが、そんなことをさせる俺ではない。

「じゃあいつでも動けるよう、準備しておいて。私は悪魔探しに戻るわ」

「ああ、頼んだ」

そういつて紫はスキマへと姿を消す。

どうするか・・・

とりあえず、さとり達を一か所に集め、守りやすいようにするか。

そう思いながら、歩いているときだった。

「キャアアアアアアアアアア！」

！？

今の声はさとりか！

まさか、もうここに居たのか！？

くそっ、いらん事を考えずにさっさと守りに入るべきだった！

間に合ってくれよ・・・！

「はっ、なんだア？ここの連中は齒こたえねエ奴らばっかだなア、オイ。」

こんななら地獄の方がよっぽど楽しかったぜエ？」

「くっ・・・貴様・・・よくも我らを・・・」

「うるせエよ！鬼神なんざ言ってもただの耄碌爺かア！？期待外れにもほどがあんぞコラア！」

声がした場所に着くと、そこにはさとりを守るように立つ、鬼神がいた。

どうやら鬼神がさとりを守ってくれていたようだ・・・じゃねえ、早く助けねえと！

「待て！お前が地獄から出てきた悪魔だな！？」

「アア？新手ですか！？なんだよ、テメエ等もう俺の正体掴んじやつてんのオ？」

「俺はお前が悪魔かどうか聞いてるんだよ・・・！」

久々に切れそうなんだよ・・・！

俺の親友と、愛しい奴をここまで痛めつけられて、もう沸騰直前なんだよ・・・！

「ああそうだよ、俺はソロモン72柱が一人、ベリアルだ」

「そうか・・・なら安心して俺はお前をぶっ殺せる・・・！」

「やってみろよオ！ テメエは楽しませてくれよ！」

そう言ってベリアルは黒い炎を飛ばしてくる。

「はっ！地獄の炎つてのはすべてを燃やしつくすんだぜエ！？」

なにか言ってるが俺には聞こえない、聞く気がない。

俺は炎を無視して進む。

「なぜ貴様燃えねエ！？クソがつ！」

ベリアルは焦りながらも雷で威嚇してくる。だがそれすらも俺は無視し、進む。

「裂衣掌」

一発、掌底をたたきこむ。

それだけでベリアルのは体は浮く。

「昇華」

妖力と霊力で作った弾幕を放ち、上へと飛び上がる。

「龍星群」

圧縮した妖力のレーザーを放つ。

そしてベリアルは地面にたたきつけられる。

「ガアアアアアアアアア！クソガアアアアアアアアア

アアア！テメエみてエなゴミに負けるなんざありえねエんだよおおおおおおおおおおお！」

「それはこっちのセリフだ、三下が！楽に死ねると思うなよ？」

惨劇『失樂園』

どうやら、ベリアルも本気を出したようだ。

ゾンビのようなものが起き上がり、こちらへと向かってくる。数が多く、ベリアルもこの技を発動させた時点で姿をくらましている。

「これが貴様の本気か？なら拍子抜けだな」

『天激』

霊力と妖力、それらを圧縮し、全方向にぶちまける。すると、ゾンビ達が消え、ベリアルの姿も出てくる。

「なぜお前には能力が効かん！なぜお前には技が効かん！なぜだ！？」

「お前が弱いだけだろう。些か飽きた。そろそろ終わりにしよう」

そういうと、無界さんは部屋から出ていく。
ここには俺とさとの二人だけ。

「恭さん・・・」

「さとり・・・ごめんな、怖い思いさせて・・・」

「いいです・・・だけど、少しの間だけ、抱きしめていてください・・・」

さとりがそう言うのと、俺はさとりを抱きしめる。

俺の家族で、もっとも大切な人。
絶対に失ったりしない。
何があってもさとりは俺が守る。

そうして、時間は過ぎて行った・・・

14話（後書き）

はい、14話です。

一体俺は何を目指しているのかわかんなくなってきました。

そしてベリアルのかませ具合、なにこのちょっと強いオーラ出してるのに残念な人。

技説明：

裂掌：

妖力、または霊力込めた掌底。

昇華：

妖力と霊力で作った弾幕を逃げ場がないほどに散りばめた鬼畜弾幕

龍星群：

魔理沙のドラゴンメテオ、ただしレーザー極太＋数本

惨劇『失樂園』：

そこらに居る、魂やらなんやらに肉体を与えて蘇らせる法
通常なら敵対している者の肉体までも乗っ取る。

ほんととは出すのはルシファーだった時のなごり。

そしてなんとなくイメージで作ったスペル。

元ネタの失樂園はこんなじゃないです。

天激：

靈撃をさらに強くしたもの。

これだけで周りが吹っ飛ぶ威力。

無限『終わりなき終わり』

【存在している】ということを【存在していない】ということに
対
応して、存在自体を消す技。
ほぼチート

15話（前書き）

ブレーカー落ちたり、ブラウザフリーズしたりで5回ほど書き直させられました。

もう書き直したくないお・・・

そして最初書いた奴の面影が欠片も残っていないでござる
どうしてこうなった

15話

ベリアルを消して数日が経った。

妖怪の山の天狗達や、その他の幻想郷全土の妖怪達には、ベリアルが幻想郷に來た事は伝わっていない。

ただ、力の強い妖怪（天魔や魔法の森の主、風見幽香など）や、地底の妖怪達はその強大な力を感じ取っていたらしく、今は紫が説明に回っている。

それはさておき、俺があの時使った“無限「終わりなき終わり」”は【存在していない】という仮定を作りだし、それをベリアルが【存在している】という事に対応させ、ベリアル自体が【存在していなかった】という結果を出させている。

その結果で、どうなるかは知らない。自分に使うわけにはいかないし。

多分存在が消えるだけでどこかのG・E・レクイエムみたいに死に続けることはない。

閑話休題

まあ、そんな事だからベリアルはもうこの世に存在しないはずなのだ。

そのはずなのだが・・・

「聞いているかい？」

「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」

「命取りもなにも、僕は説明しているだけなんだがね？」

結論から言うと、目の前にベリアル（自称）がいる。

「で、そのベリアル（仮）がなんでここに居るんですかねえ？」

「（仮）ではなく本物なんだがね。

ま、君が消し飛ばしたベリアルの代わりに作られた存在ってところだよ、僕は」

「作られた・・・？どういうことだ」

「簡単な話、神話や聖書に出てくるような悪魔が突然消えるなんて事があれば、世界で色々面倒なことがあるのさ。

そこで世界の修正力なのか、神の力なのか、僕っていう存在が作られた。

だけど、ベリアルは悪魔としては最上級の位を持つからね、神といえどもその力すべてを最初から作ろうとすると、とてつもない神力を使うことになる。

だから一旦作るだけ作って、あとは前のベリアルを消し飛ばした君に守らせて成長するまで待とうって話になったみたいだよ」

「つまり、神はお前を作るだけ作って育てるのは俺に全部任せたと？」

「そついうことだね」

おお神よ・・・貴様なんていう面倒くさい事を押しつけてきてやる・・・

「・・・具体的にはなにをすればいい？」

「使い魔として契約してくればいいよ。それだけで君の霊力や妖力といったものが僕に流れ込んでくる。それを魔力に変換するだけでも、そこの奴には負けない程度には強くなれる。

妖力や霊力が少し減る程度で、それ以外に君が損することはまずないと思ってもらって構わない。

ちなみに、契約するならこれに署名してくれるだけでいいよ」

契約書を受け取り、見てみる。

・・・なぜに見たことない文字なのに意味が理解できる。なにこの謎の技術的なもの

「一応、文字については見るだけで頭の中に文が入るようになってから、文字が読めなくても関係ないよ」

なるほどね、だから意味がわかるのか。

魔術とか魔法とかの類のものか？

まあ今はそれは置いておこう。

俺は説明文（文自体は読めないが）を読み、それにサインする。

「・・・よし、これでいいのか？」

「うん、大丈夫だよ。

じゃあ、

我が名はベリアル

80の軍団を統べる王にして魔神

貴公を主と認め、我は今ここに忠誠を誓う

ここに契約は交わされた」

「・・・すっげえ似合わねえの」

「うるさい、これを言わないと契約が成立しないんだ」

「ま、そういうのは今はいいや。

それで、ベリアル・・・は呼びにくいし、そのまま呼べば色々問題があるか・・・」

力が弱いつていっても、ベリアルっていう名前だけでも弱小妖怪や人間にとつては脅威になる。

うっかり人里や妖怪の山で呼べば、警戒されるならまだしも、退治しようとする輩もいるだろう。

「・・・うん、これからお前はリアだ。そう呼ぼう」

「なにがどうなってそうだったんだい？自己完結されても僕には分からないんだけどね」

「リアってさ、ベリアルじゃん？例えば、今は地底、それも地霊殿の俺の部屋だから別にいいけど、地上に出てそのままベリアルなんて呼んだら妖怪や人間が混乱するだろ？

それに、下手に人里で呼んだら、命知らずな退魔師が襲ってくる可能性もある。

だから今日から俺は“リア”って呼ぶ事にする。安直なのは勘弁な」

「ちゃんとした理由があるならいいが・・・

そうすると、翼も出さない方がいいんだね？」

「まあそうだな。出来るなら、外に出るときは人間の姿で、だな。あと、しばらくは地上に出るつもりはないから、一応地底の住人にはリアの説明はしておこう。」

鬼達もさっぱりした性格だから別に恨まれてるって事はないだろう。それで、出来れば俺が地霊殿に居ない間はさとり達を守ってやってほしい。

俺の力を渡したんだから、下手な妖怪に後れをとるなんて事はないだろうしな」

「了解したよ。契約の元、その命令に従おう」

「ああ、頼むぜ。そういや、能力聞いてなかったな」

「僕の能力は『黒雷を呼ぶ程度の能力』さ。黒雷は地獄の雷と捉えてくればいいよ」

「ん？前のベリアルって炎も使ってたか？」

なんか地獄の炎はなんたらこうたらって言うてかませ臭出してたよ
うな

「あれは『地獄を顕現させる程度の能力』だっただけの事だよ。能力も力に依じて弱くなってるみたいだね」

「そついうもんかね」

~~~~~

そんなこんなで、新しいベリアル・・・リアとの契約を終え、さとりや鬼達といった地底の住人達に紹介して回った。

その中で、無界さんがリアを気に入ったらしく、稽古を付けてもらえるようだった。

まだ生まれたばかりで、俺の力の一部を魔力に変換して持っているとはいえ、まだまだ弱いリアにとっては良い話だろう。スパルタ教育なんてレベルじゃないが。

正直、俺は教えるのには向いていないと自負しているので、それはよかったと思う。

さとりにも、リアが力を付けたら警護として付ける事を伝えておいた。

原作が始まるくらいには、そこの妖怪には負けなくらい強くなっているだろう。

むしろ、仮にもベリアルと名乗るのだから弱いままでは困る。

原作が始まれば、介入する気は結構あるので、任せることも増えるだろうしな。

まあ、そんなこんなで色々騒がしかった悪魔騒動も、鎮静化した。

だが、俺が紫から面白くもない話を聞くことになるのは、その数ヶ月後だった・・・

## 15話（後書き）

リアの見た目ですが、MUGEN グローリアってググってください。

シメール化後にレミリアっぽい翼付けたのが悪魔の時の姿と捉えてもらえればよろしいかと。

人間時の姿は、グローリアのままではなく、小さくなった咲夜さんって感じですかね？

もともと咲夜さん改変キャラなんであんま変わりませんけど。まあイメージ的にはそんな感じです。

そしてなんか変なことになります。

なんか時期がすごい早まりましたけど、次回はあれですね。予想付く人も多いと思いますが、ここでは伏せておきます。

元ネタ？のようなもの

黒雷Ⅱ某DQのジゴスパーク

## 16話（前書き）

予想付いたかと思いますが、龍神戦の前編です。

今回三人称として、other sideつてのを入れてみました。  
これからは三人称入れる時は最初から三人称の場合は「other  
side」

途中から三人称にする場合は「side out」でそのまま誰サイドか付けないまま入ります。

## 16話

・・・other side

ここは天界よりもさらに上空の聖域。

神が住まい、人には入れぬとされる空間。

そこには今、一組の男女が向かい合い、立っていた。

男の方は龍神。

幻想郷の神であり、誰しにも崇められる存在である。

そして、その力は幻想郷を破壊、創造できるほど強大なものであり、龍神が声を上げるだけで天を割り、地上に雷雨をもたらし、体をうねらすと山が崩れ、地震が起こると言われる。

それほど強大な幻想郷の神に相對するは、妖怪の賢者、八雲紫。彼女は龍神に幻想郷を貰い受けに、交渉を重ねていた。

しかし、数か月前、とある悪魔が幻想郷に進行してきた。それは、幻想郷の神たる龍神にとっては面白くないことであり、許さざることだった。

同時に紫の管理者としての力量にも、失望していた。そして彼は一つの余興を思いついたのだった・・・

・・・side out

・・・紫side

珍しく、今日は龍神に呼びだされた。

いつもは私の方から会いに行っているというのに。  
何の用なのかしらね？嫌な予感がするわ・・・

「・・・弱き者よ」

「あら、龍神様。ご機嫌麗しゅう」

「其方は我が領地の管理者でありながら、彼の地に悪魔の侵入を許し、拳句人間にその始末を任せた。  
其方には些か失望したぞ。

だが我はその人間に興味がわいた。我の元に連れてくるがよい。」

「人間を・・・ですか？一体なにをなさるのでしょう？」

「其方らは我が領地を求めていたな。

そこで我とその人間で戦い、其方らが勝てば我が領地を譲り渡そう」

ククク、と龍神は笑いながら言う。

恐らく、龍神は私の交渉に飽き飽きしていたのでしょう。

そして数力月前に起こった悪魔の進行。

ただ拒否するだけならば、私が諦めないと思ってこうやって交渉してきた・・・という所からしらね。

だけど、これはこっちにとっても都合がいい条件。

「人間」の恭と、「龍神」の彼。

誰もが龍神が勝つと思うでしょう。

だけど、恭に限ればそうじゃない、きっと彼は勝つ。

「良いですわ。では、明日にでも連れて来ましょう」

「ククク、楽しみにしているぞ」

・・・紫side out

・・・恭side

「時は来た・・・ってことか」

「ええ、そうね。」

私の計画はあなたが勝つ事を前提に進めているわ。だから絶対に勝つて頂戴」

「はっ、随分期待されたもんだ。」

いいだろう、勝ってきてやる。その代わりもう一つ条件を飲んでくれないか？」

「なにかしら？」

「たまにはさとり達を地上に出してやってくれ。」

いつもいつも地底を見て回るだけなのは味気ない。それに、俺の家族を知り合い達にも紹介したい」

「・・・いいわ。そのくらい幻想郷が手に入るなら安いものよ」

「んじゃ、頼んだぜ。俺はさとりに話してくる」

・・・少年移動中

「てな訳でちよつと行ってくるよ」

「そうですか・・・」

決して無理はしないでくださいね？貴方は無理をしすぎますから・・・」

「ん、それは約束できないね。

けど、無茶はしない。それは約束するよ。」

あと、これが終わったら皆で地上に出よう。紫には許可貰ったからさ」

「いえ、私は「拒否するのは認めんよ」・・・なんでです？」

「俺がさとりと地上に出たいから。だから出ないなんてのは認めない。」

それに、地上の連中にも俺の家族を紹介したいんだよ」

家族って言葉を聞いた瞬間にちよつと頬が赤くなつたな。

家族って言われるのはうれしいんだな。

「ほ、本当に仕方のない人ですね、あなたは・・・」

じゃあ絶対、絶対に無事に帰ってきてください。約束ですよ？」

「ああ、無事に戻ってくる。そんな心配しなくても死にはせんっての。んじゃ、行ってくるぜ」

「はい、いつてらっしゃい」

ま、家族に心配かけない程度に頑張りましょうかねえ

・・・恭side out

さとりと別れ、紫と恭は天を昇る。

恭はさとり達とゆつくりと、楽しく暮らすため。  
紫は自分の理想である幻想郷を完成させるため。  
それぞれの願いを秘め、二人は龍神の住まう聖域へと昇る・・・

・・・恭side

「そういえば、あなたに渡す物があつたわ」

そう言い、スキマを開き中を探る紫。

なんか心当たりあるかな・・・なんも思いつかん

「はい、これ。龍殺しに使われた剣よ。当然、概念として龍殺しが付いてるわ」

「ちょっと待て！そんなもんどつから持ってきた！？」

神話上で龍殺しに使われた剣ってなんかあったか？

日本なら天羽々斬剣あめのばきりのつるぎがあったはずだが、北欧神話となるとあんまり知らんぞ・・・

「あなたが私に“王の財宝”の事を教えてくれたのよ？

あれから時間が空けばこういうのを探してきてスキマに溜めこんでおいたの。

たしか、ジークフリートって人間が使っていた剣らしいわ」

うん、『ニーベルンゲンの歌』だね。

ってことは、その剣は『魔剣バルムンク』か！？

なんちゅうもん持ってきてくれやがってんですかこの人は・・・

ていうか、昔の話はフラグだったんですか！？

この調子ならマジで神話の武器めっちゃ持ってそうだな・・・  
そっぴゃ、香霖堂にも草薙の剣かなんかあったよな。

あれももしかして紫が持ってきてたのか？

「OK、分かった。お前はそれを俺に持たせて何する気ですかねえ？」

「いくらあなたでも、素手で龍神と戦うのは辛いでしょう？だからプレゼントよ」

「貰えるものは貰っておくよ。ま、使わない事を祈るけどな」

「ええ、貰っておきなさい。もうすぐ着くわよ」

いよいよ龍神との決戦か・・・

ま、死なないように頑張ろうかねえ・・・

-----

「よくぞ来た。人間よ」

「お前が龍神か？人にしか見えないが？」

「仮の姿を取っているにすぎん。

まずは、我が地に侵入した悪魔を撃退したこと、礼を言おう」

「あゝ、そう言うの良からさ、早く始めようぜ？

俺、早くさとり達と地上を歩きたいんだよ」

一瞬、龍神は驚きの顔を見せ、笑う。

「クハハハハ・・・

我を前にしてそのような事を言うか！よからう、では始めるとしよう！」

「我は龍神、我を超えて見せろよ！人間！」

「武幻恭、細やかな理想のために超えさせてもらう！龍神！」

## 16話（後書き）

前半、龍神戦前までです。

これを龍神戦って言うていいのか分からんけどね！

そして途中でちょこつと触れた、紫のゲート・オブ・ゆかりんです。原作開始までに慢心王レベルと言わないまでも、かなり強化する予定です。

余談ですが、草薙の剣は魔理沙が元々持っていたっぽいですね（香霖堂話）

けど、恭はそれを知らず、香霖堂においてある事だけ知っているっていう設定です

さらに余談、

ニールンゲンの歌の魔剣バルムンクは、ジークフリートの持っていた剣で、洞窟の宝を守っていたファフニールというドラゴンを倒したという物です。

なので、一応神器ではないにしても、龍殺しの効果を発揮できるかと思ひ持たせてみました

## 17話（前書き）

後編ですかね？

色々考えた結果、自分の中ではこの結末がいいかなと。  
作者の文才の無さを表してますね

## 17話

・・・other side

ここに相対するは二人の男。

すでに八雲紫はスキマを通り、避難を済ませている。

一方は人間、武幻恭。

人間の身でありながら、100年を超える年月を生き、最上級の悪魔であるベリアルを消し去った男。

彼は家族である地霊殿の者達と地上に出られるよう、そしてのんびりと暮せるために戦う。

一方は神、龍神。

幻想郷の神であり、途方もない力を持つ。

彼は久しく見なかった、自分と張り合えるほどの力を持つ人間に興奮していた。

戦う理由など、どうでもいい。ただ戦いを楽しめればいいのだ。

互いの理由はあれど、今ここに幻想郷最強を決める闘いが始まろうとしていた・・・

・・・side out

・・・恭side

やべえやべえ、何がやべえって神力がビリビリ肌に伝わってきやがる。

鬼神である無界さんも神力持ってたけど、これはまさしく桁が違う。これは能力全開の全力で行ってもきついかもな・・・

それに、相手の能力もまだ分らない。

下手に仕掛けてカウンターでも食らったら洒落にならん。

「・・・私の能力が知りたいのか？」

「お前は心でも読めんのか」

「神たるもの、その程度出来なくてどうする。私の能力は『創り出す程度の能力』だ。

これを知られた所でさした問題ではないがな」

創り出す・・・か。

厄介な能力だなおい

「来ぬのか？ならば我から行かせてもらっぞ」

「クツ！？」

掠っただけで軽く痺れたぞ！？

天魔よりは遅いがそれでも速い！

その上鬼神よりもパワーは上かよ！？

どんだけ強いんだよ・・・さすがにあの速さでまともに攻撃食らったらやばいな・・・

「ちっ、なら攻めさせなきゃいいだけだ！」

弾幕で牽制しつつ、接近戦の距離まで近づく。

「裂掌！天破！回転百花・狂熱！」

裂掌で宙に浮かせ、天破で地面にたたき落とし、狂熱で燃やす。しかし、そのどれもにダメージを与えたという手ごたえはなかった。

「ほう・・・人間でそれほどの高みまで上り詰めたか。

素晴らしいな、やはり人間はいつだって思いもよらぬ事をしでかす」

「結構自信あつただけだなあ・・・今のコンボ・・・」

ここまでダメージを受けてる様子がないと、少しへこむ。

仮にも、奥義の一つである回転百花を使ったのだ、少しくらい効いててほしかった。

しかも、能力で龍殺しも発動させてあるにもかかわらず、だ。

「我の能力を忘れたか？そんなもの、耐性を創り出せば蚊ほども通らぬわ」

予想以上にメンドクサイ能力だ。

耐性を創り出す、ってことは俺とほぼ同じ、能力を使った攻撃も効かないだろう。

つまり、なんちゃって固有結界や無限も使えない。

いやまあ無限は使った時点で終了な気もするけども。

と言っても、防御自体を創り出す事はできないはずだ。

殴り続ければ終わるだろう。

その前に俺が負けなければ、の話だが。

「ふう、考えるまでもないか・・・なら、攻め続けるしかねえよなあ！」

「被え」

ちよつと待てゐ！

貴様それはオロミズの技じゃねえか！？

何使っちゃってくれてんの！？

「飛び道具も持つてるとは以外だなおい」

「主らのやっておる事とさほど変わらぬだろう」

オロミズの技使ってきた、ってことは多分あれもあるんだろうなあ・・・

出来れば使わずに終わらせたいが、無理だろうなあ・・・

「壊天・闘破」

一応、俺の使える中でも、威力の高い奥義の一つだ。

回転百花が速さの奥義ならば、壊天は威力の奥義。

モデルはグラグラの実。

天を殴り、破壊する。ゆえに【壊天】

まあ、威力が高い分連打には向かないのと、コンボに組み込めないのが難点だな。

「ブツつぶれるオoooooooooooooooooooo！！」

「グウウウウー！？図、に、乗るなあああああああ！！」

壊天と張り合うとかどんな力だよ!?

だがまだ予想の範疇だ!

今のうちに……!

「後ろがから空きだぜ?」

「なっ!?! ガハア!」

壊天に気を取られている隙にバルムンクで斬りつける。

だが、まだあと一手足りないか……

「よもや人間にここまで追い詰められるとは思わなかったぞ……」

「人間なめんなってこつたな。さあ、仕切り直しといこうぜ?」

「……その必要はない。これで終わらせる。」

「さあ、無に還ろう」

瞬間、辺りが光に包まれる。

うえ……やっぱそれ使えるのかよ……

と、んな事考えてる場合じゃねえな。

無界さん、あんたの技借りるぜ

「すべてはムとカエる!」

絶界の領域と、龍神の攻撃の領域とが触れ合い、互いに均衡する。  
均衡状態になったのもつかの間、妖力と神力が爆発を起こす。

「驚いたな・・・まさか人間の身であれを相殺するとは・・・」

「で？んな油断してていいのか？余裕だなおい」

ありえない。そう顔に出して、呆然と立ち尽くす龍神に迫る。

「終わりだ。斬龍刃」

「あり・・・えん・・・」

即興で作った技だけだな。

バルムンク自体の概念にプラスして俺の能力も付け加え、さらに龍神の能力にも干渉した。

さすがにあのレベルの相手だと時間がかかったが、ちゃんと対応できた。

つまり、龍殺しの剣＋概念としての龍殺し＋神殺しというわけだ。オーバーキルな気もするが、大丈夫だろう。龍神ならなんとかなる多分。

ていうか、ありえんって思いっきりミズチじゃねえか。やっぱお前ミズチか、そうなのか。

「お疲れ様。龍神とは私が話を付けるから貴方は戻りなさい。スキマで送ってあげるわ」

「おお、紫か。」

すまんね、さすがにこれ以上動くのはきつついわ」

「こっちこそありがとう。」

貴方のおかげで幻想郷という私の理想が完成するわ」

「気にすんな、俺は俺のやりたい事やっただけだ。これからも力借りたいたいなら呼べよ？  
じゃあな」

はあ、マジで疲れた。

さとりに癒してもらおう・・・

## 17話（後書き）

まず一つ、天魔の速さですが、作中で能力に触れていなかったの  
ここに書いときます。

天魔は『光になる程度の能力』です。なので、基本天魔より速く動  
ける生物はいません。光の速度超えるなんて無茶ですし。

詳細的には、体自体を光に変える事が出来る程度しか考えてません。  
思いつきだから仕方ないね！

なぜに無界さんの技使えるし、とかは100年の間に色々あったっ  
て思ってください。作者は何にも考えてないんで。

次話はちよいと外伝、IFの世界でございまする。

もしゼロ魔の世界にいったら？

もしFateの世界にいったら？

って感じのお話です。

その次からはまた適当に妖怪の山、人里、太陽の畑でも行かせよう  
かなー

## 番外 IF世界（前書き）

もし無界さんがゼロ魔の世界に行ったら  
もし恭がFateで召喚されたら

の二本立てでお送りします。

そして最近気づいた事。

キーワード設定してなかったorz

最後の方がなんか気になったので大幅に修正というか、書き直しました。

2

追加で恭innゼロ魔もやっちゃいました。

（こんなの書いてる暇あるなら本編やれって話）

## 番外 IF世界

「岩洞無界 in ゼロの使い魔」

トリステイン魔法学院・・・ここでは使い魔の召喚の儀式が行われていた。

そして、今『雪風のタバサ』と呼ばれる少女が使い魔を召喚した・・・

-----

「・・・うん？ここはどこじゃ？」

岩洞無界、鬼神である彼はいつものように地底で配下の鬼たちと酒盛りをしていた。

そして、突然現れた鏡に興味を示し、他の者が止めるのも聞かずに入って行ってしまったのだ。

「平民・・・か・・・？」

「いや、あんな黒い上にでかい平民居るか・・・？」

周りにいる、生徒たちは召喚された無界に興味を示しながらも、その異様な姿に恐れていた。

当然だ、彼は人間ではない。妖怪の中でもトップクラスの实力を持つ鬼神なのだ。

召喚した本人、タバサは畏怖の念を抱きながらも、この使い魔なら自分の願いをかなえられる・・・そう感じていた。

（はて・・・ここはどこかのう・・・）

見た所、地底では絶対にならないのう。それに周りの人間たちはなんなんじやろうか・・・？）

「考え事の最中、申し訳ありません。私はジャン・コルベール、二つ名は『炎蛇』。

このトリステイン魔法学院の教師を務めている者です。ミスタ、失礼ですがお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「儂か？儂は岩洞無界、恐れ信仰される鬼の神よ！」

これは、少女と鬼神の何とも奇妙な物語である・・・

（ギーシュVSサイト）

「ふむ、なにやら面白い事になっておるのう・・・」

タバサと共に食事をとっていた無界は、サイトとギーシュの口論を見てそうつぶやく。

「ちよいと混ぜてもらおうかのう」

「あっ・・・」

タバサの制止も間に合わず、わざわざ首を突っ込みに行く無界。争いごとを見ると血が騒ぐのは鬼の本能なのだろうか？

「なんだね、君は！？君には関係ないだろう！？」

「いや、決闘という言葉が聞こえてきたのでな。

そのの・・・サイト君だったかの？見た所、彼は魔法はおるかまともな体術すらできそうになかったのでな、ちよいとこの儂が代わりに決闘を受けようと思ってのう」

「君はミス・タバサの使い魔だろう？これは僕とその平民の問題だ！口を出さないでくれ！」

「やれやれ・・・少しは落ち着けい、小僧が。

それとも何か？儂が相手だと勝てる自信がないのかの？」

「そんなわけあるはずない！いいだろう、まずは君から相手だ。貴族に逆らうとどうなるか、教えてあげよう！」

無界はこの世界に来てから、一度も暴れることができなかった。

そんな鬱憤や、異世界に来た事で能力や体の変化がないか、戦闘で確かめたかったこともあるのだろう。

そして、この世界で鬼といえバオーク鬼やトロール鬼などの種族しかない。だからこそ、この世界では『鬼神』という称号は余り意味をなさないのだ。

この言葉の意味を分かるのはサイトただだろうが、彼もまた無界より後に召喚されたので無界の称号を知らない。

「勝手な事はしないで」

「おお、すまんすまん」

そんな鬼神も主には弱いようだ。

カット…カットカットカット  
カットカットカットカット  
カットカットカットカット

……！

時は飛び、ヴェストリの広場。

ここでは、今から決闘が始まろうとしていた……

「僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「む、名乗りを上げねばなんのか。

ならば……儂は岩洞無界。二つ名は……『鬼神』がそれにあたるかのう？それではかかってくるがよい」

そんな無界の名乗りを聞いたサイトは驚きを隠せなかった。

それは当り前のことだろう。昔話に出てくるような、人では敵わない存在の一つが「『鬼』、その中でも最強の存在なのだ。驚かない方が無理というものだ。

「鬼神！？おいルイズ！ギーシュを早く止める！」

「あの使い魔を心配してるの？そんなの「そっちが心配なんじゃない！ギーシュがやばいんだって！」何言ってるのよ、貴族があんな使い魔に負けるわけじゃないじゃない」

まあ、鬼神を知らない人間はルイズのような反応をするのが普通だろう。

それは無界の主であるタバサも例外ではなかった。

「行け、ワルキューレ！」

そんな心配をよそに、ギーシュと無界は闘いを始める。

「ふむ、動きが単調すぎるのう。」

これならば最初に出会った恭の小童の方が幾分楽しめたぞい」

能力チートのコピー野郎と比べるのはどうかと思うが、ただのゴーレムなど無界の敵になりうるはずもない。

次々と襲いかかってくるワルキューレを殴りつけ、破壊していく。

「な、なんていうことだ・・・でも一体一体ならともかく、7体同時なら防げまい！」

バラを模した杖を振るい、剣や槍などを持ったワルキューレを6体作り出す。

それに残っていた1体のワルキューレが合流する。

しかし悲しいかな、たとえ千、いや万の数のゴーレムをそろえた所で無界には勝てない。

「ふむ、身体能力と妖力、神力に衰えなし、と。では能力を使ってみるかのう。」

危ないで周りの者は離れておくようにのう!」

無界をそう叫び、ある程度皆が距離を取ったのを確認すると、能力を発動させる。

「すべてはチリと力す!」

最小限に威力を抑えた死界、それはワルキューレ全ての動きを止め、追撃の妖力波で粉々に砕いた。

ギーシュは突然起こった自体に困惑し、呆然としている。

「な・・・あ・・・え・・・?」

「ふむ、ちとやりすぎたかのう? まあよい灸になったじやろ。」

ギーシュとやら、今後は相手の力量を測るのも生き残るには必要なことじゃぞ」

そう言つてタバサの元に戻っていく無界だが、ギーシュは未だ呆然としたまま戻ってきていない。

「あれはなに? 見たことのない魔法だった」

「うん? あれは死界と言つてな、儂の能力の一部じゃよ。能力といふのは儂の世界の特有の物でな・・・」

「なんだったのよ・・・あれ・・・」

「鬼神つて・・・やつぱりすげえんだな・・・」

サイトやルイズ達、見物人は信じられないものを見た、というような表情で立ち尽くしていたという・・・

そして無界がその後タバサに質問攻めをされて意気消沈するのは完全なる自業自得である。

「恭 in ゼロの使い魔」

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！ 神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！ 私は心より求め、訴える！ 我が導きに、応えなさい！！」

トリステイン魔法学院では使い魔の召喚の儀式が行われていた。

「ああ？ここどこだよ・・・」

「あんた、誰よ」

・・・恭 side

ちよ~~~~つと待とうか。

今なんか聞きたくねエ声が聞こえた気がするんだが。ていうか目の前のピンクのちびっこいのは見間違いだよな？

「ちよつと！質問に答えなさいよ！」

・・・はあ。ここゼロ魔の世界か？  
んで目の前のがルイズと。  
ルイズが主で俺が使い魔？才人どこいったよ。

「はあ、俺は武幻恭、人間。年は秘密。これでいいか？」

「そんな・・・召喚したのが平民だなんて・・・  
ミスタ・コルベール！」

「なんだね？ミス・ヴァリエール」

「あの一もう一回召喚させて下さい！」

「それは駄目だ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか！」

こっちの意思は無視ですかそうですか。  
ふざけんなよ馬鹿ヤロー

「リア、来い」

俺と契約してパスが繋がってるあいつなら、世界とか関係なく見つ  
けられるはずだろ。

スキマ使えば空間移動出来るけど、世界はまだ越えられない。  
それに、あいつはちよくちよく他の世界にも行ってるっぽいし、こ  
のくらいなら大丈夫だろ。

隣りの方ではコルベールとルイズが話してるが、その間に空間に歪

みが奔る。

「ふう、ご主人？世界を超えるのは中々辛いんだけどね？」

「知らん、俺の力使えばそれほどでもないだろ。」

それより、幻想郷に俺を連れて帰れるか？」

「・・・無理だね。僕とご主人じゃ力の差が激しすぎる。」

ご主人が能力で弱体化したとしても、それだと僕の魔力の供給源もなくなるから無理だ」

「マジかよ・・・」

「ちょっと！なによそいつ！」

あゝ、また突っ掛かってきたよこのちびっ子は・・・

「こいつは俺の使い魔みたいなもんだ」

「使い魔の使い魔？それは興味深い・・・」

なんかコルベールもこっち着たし・・・

「とりあえず、さとりに事情説明しといてくれるか？  
んで、さとりを連れてこれるなら偶に連れて来てくれ」

「了解したよ。それじゃ、頑張つてね」

そう言つてリアは帰っていく。

ふう、メンドクサイがこっちにも説明しなきゃいかな。

ていうか、色々突っ込みどころ多すぎ！って顔で何が何やらわからないって感じだな、周りの奴ら。

「とりあえず・・・コルベール、だったか？」

「この長と話がしたい。案内してくれないか」

「・・・え？あ、はい！分かりました。着いてきてください。ミスタ・キョウ」

「あ・・・！私との契約は・・・！」

「ああ、そういえば契約がまだでしたね。ミスタ・キョウ、契約について説明は必要ですか？」

「いらん。やるならとつとやるぞ」

「んで、なんでそこで赤くなるかね？己はそれからなんやかんやあつて・・・」

「わ、我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司る五<sup>ペンタゴン</sup>芒星。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

そのまま契約しようとするが、身長差があつて届かない。

「……ちよつと屈んで」

「はいはいつと」

「チュウ」

俺とルイズの唇が重なる。

「お、おわかりました」

顔を真っ赤にして、ルイズはコルベールに告げた。  
いつも思うが、これキスにする必要があるのか？

「んじゃ、案内してくれ」

ルーンが左手に刻まれているが、痛みに対応してるからあんまり痛くはない。  
というか、対応してるのに少しでも痛みを感じる時点でおかしいんだけだな。

「分かりました。しかし生徒達が教室に戻ってからでもよろしいですか？」

「ああ、確かにそっちの都合もあるだろうからそれで構わん」

「それでは皆、戻りますよ」

そう言うと、生徒とコルベールは飛行で飛んでいく。  
ルイズはというと・・・やっぱり飛べないのな。

「ちっ、しゃーねーな」

「えっ？きやつ！？」

ルイズを抱きかかえ、飛び立つ。

一応こつちの世界でも霊力と妖力とかの力は存在してるし、使える  
っぽいな。

「ちょ、ちよっと!」

「黙ってる、舌嚙むぞ」

ま、コルベールについていけばいいか。

くVSギーシュく

なんやかんやあって、オスマンの爺さんと交渉の結果一応は才人と  
違いちゃんと部屋貰ったり、飯食えたり出来てる。

けども、シエスタがギーシュに絡まれてるんだよねえ。

ならこれは助けないといかんだろ。

一応ガンダールヴの力も見てみたいしさ。

---

カット

---

「僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴー  
レム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「武幻恭、不本意ながらルイズの使い魔なんてやってるよ。  
言っとくが、最初から全力で来いよ？死んでも知らんぞ」

その言葉を聞いたギーシュは頭にきたのか、7体のゴーレムを出し

突撃させてくる。

ま、そうしてくれないと困るんだがな。

「さて、どうなるかなって」

バルムンクを構えると、力が漲るような感じがする。  
なるほどねえ、これがガンダールヴって奴か。

これなら龍神と剣だけでやり合っても勝てそうだ。

「ほいほいつと」

突撃してきたゴーレムを3体斬り飛ばす。  
残りは4体だが・・・ガンダールヴの力が分かったところで、適当に技使ってみるか。

「龍よ！力を貸せ！」

『呼んだか？強き者よ』

いやいやいや、ノリで言っただけなのになんで世界超えてきちゃってんの？龍神さん？

「いや、呼んだだけ」

『そつか・・・』

んで普通に帰るんかい。  
ま、気を取り直して・・・

「天激剣」

バルムンクに靈力をまとわせ、それを放出させる。  
その斬撃は伸びていき、ギーシュの首元で止まる。

「お前の負けだよ。ま、頑張ったんじゃないの？」

そう言つて俺はギーシュに近付き、首に軽く手刀を入れて気絶させる。

なんか周りが啞然としてるけど、気にしない。  
気にしたら負けかなと思つてる。

ま、帰る手段見つかるまでは原作壊しながら生きてやるよ・・・

〈恭 in Fate / stay night〉

・・・恭 side

「——サーヴァント、セイバー。召喚に従い参上した。問  
おう、貴方が私のマスターか？」

へえ、この目で名シーンを見れるとはねえ・・・

龍神との戦いで相打ちになり、そのままポツクリ逝ったけど、これ  
見ただけよかったかもな。

さとりにも見せてやりたかったなあ。

「と、おいマスター。セイバーのサーヴァントを確認したぞ。マス  
ターは衛宮士郎。場所は衛宮邸だ。今はセイバーとランサーが戦つ  
てるがどうする？ 介入に行くか？」

“今はいいわ、そのまま現状維持してくれる？”

「了解だ、マスター」

俺のマスターは遠坂凜、アーチャーも俺と一緒に召喚された。ていうか、どっちかって言うとアーチャーにくつついて俺が召喚された。俺のクラスはディフェンダー、守り手・・・っていう意味だったか？何も守れず、拳闘家族との約束すら破った俺には皮肉にしか聞こえんがな。

そんなことはおいといて、俺はあまり魔力を使わないのでほぼ凜からの魔力供給を切っている。

供給されなくても自分で作れるし。おもに能力で対応すれば。

その特殊性からか、俺は単独で密偵のような感じで動いている。アーチャーなら近接もできると判断したうえでの行動だ。

「さて、次のイベントまで他のサーヴァントの情報を集めるか、慢心王について調べるか、どっちにするかな・・・」

まあ時間はたっぷりある、それに能力とリアまで着いてきてる。めったな事では負けないだろう。

くVSバーサーカー1回戦く

「————じゃあ殺すよ。やっちゃえ！バーサーカー！」

「こんな所でマスターが殺されたら俺がやばいっての。マスター！宝具使うぞ！今すぐそこから逃げろ！」

“ なつ、馬鹿じゃないの！？相手はあのヘラクレスよ！下手な宝具じゃ傷一つ・・・”

あゝ、うつせ。めんどくせえからもういいや、使っちゃえ。

「『80の軍団を統べし魔神』（ベリアル）」

『おやおや、久しぶりだね、ご主人』

「ああ、久しぶりだな。まあ今は何も言わずあれを足止めしてくれ。理由は後で話す」

『命令とあらば承ろっ』

さて、俺は士郎と凜達の救助に向かいますかね。

くVSバーサーカーく

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

はい死亡フラグ乙。

今の状況はイリヤに攫われた士郎を助けて帰る所だな。

そしてさっきの俺が一番好きかもしれないカッコイイ死亡フラグだな。

原作ならここでアーチャーが残ってるんだけど、ま、今ここには俺もいるし、わざわざアーチャーを残らせる必要もないだろう。

「マスターよ、俺がいる事忘れてないか？アーチャーを残らせるより俺が残ろう」

「ディフェンダーよ、君は凜の傍にいたべきだ。君が何者かは知らないが、かのヘラクレスの相手は辛かるう」

「それを言うならお前もだろうが。それにな、俺の守る対象にはお前も入ってんだよ、アーチャー。」

「さあマスター、命令しろ。自分たちを守れと。俺はそれに従い、全力で守りきろう」

「・・・分かったわ。」

「ディフェンダー、私達が逃げ切るまでバーサーカーを足止めし、私達を守り切りなさい！」

「了解した、何が何でも守りきろう。」

「さあ早く行け！お前らの後ろは全力で俺が守りきってやる！」

「ていうか、ほんとに早く行ってください。」

「俺の固有結界見られたくないんだよ。」

「任せました」

「任された」

「アーサー王に任されるってのも、恐縮な話だねえ。」

「アーチャーは無言でこつち睨みながら走って行ったが・・・気にしないようにしよう、うん。」

「別れ話は済んだ？やりなさいバーサーカー！」

「■■■■ー！！」

「ふう、別れ話をした方がいいのはお前らの方だったんだがな？  
生憎、俺の最終兵器は人に見られるちゃ困る、ってほどでもないが、  
あんまり見られたいものじゃないんでね」

襲いかかってくるバーサーカーの斧剣をバルムンクでいなしながら、  
回避できるものは避ける。

いなしてるだけなのに手が痺れるってどんな力してんだよ・・・

「さて、そろそろマスター達は十分逃げたかな？」

「バーサーカー！遊んでないで早く殺しちやいなさい！」

「んな殺す殺すいうなつての・・・

けどもいいや、他の奴らも見えないだろうし、ここら辺で使っと  
くか」

・・・恭 side out

・・・other side

固有結界『今は遠き幻想郷』、発動。

周りは緑豊かな自然に囲まれ、山や森が広がっていく。

「これは・・・固有結界・・・？」

「おら、お前ら！手伝え！」

『ひどくありません事？私達を勝手に呼びだしておいて・・・』

『ククク、それでこそ恭というものじゃがのう』

『私としては早く山に帰って仕事をしたいのですが・・・』

『雷光はこんなときくらい仕事の事忘れてもいいと思うよ』

『恭さん・・・お久しぶりです』

『我を呼び出すとは何事か』

いつの間にか、恭の周りには人であふれている。

いや、正確には人ではない。

全員、妖怪や神である。しかも、彼らは恭と戦って生き残り、絆を深めた者達だ。

「バーサーカー、貴様が相手にするは今は忘れられた妖怪達だ。さあ、越えて見せろ」

そう言った瞬間、能力や妖力、神力が解き放たれる。

いかにヘラクレスといえども、彼が相手にしているのは龍神や鬼神、天魔などの膨大な力を持った者達なのだ。

そんな者達が一斉に力を解放すれば・・・耐えられるはずもない。十二の試練？そんなもの関係ないとばかりにバーサーカーに襲いかかる力の波。

「■■■■■■ー！！」

木端微塵。

そう呼ぶのが相応しい最後だった。

## 番外 IF世界（後書き）

ちなみに、恭のステータスは大体こんな感じ？

【マスター】遠坂凜

【クラス】デیفエンダー

【属性】秩序・善

【真名】武幻 恭

【ステータス】

筋力 B      対魔力 C（EX）

耐久 B（EX）      幸運 C

敏捷 B      宝具 EX

【クラス別スキル】

守護：A

守るべき者が近くにいる場合、全てのステータスが1ランクアップする。

【固有スキル】

対応する程度の能力：A

ありとあらゆる物に対応し、対応した場合は対魔力、耐久がEXとなる。

そして攻撃を見るだけでコピーできる。

例外として、ただの物理攻撃は少しだけ通る。

単独行動：A+

マスター不在でも行動できる能力

### 【宝具】

『80の軍団を統べし魔神』（ベリアル）

ランク：B      種別：対軍宝具      レンジ：1      20      最大補足：  
100人

ソロモン72柱の一柱、ベリアルを召喚する。

最盛期の力を操り、地獄を顕現させる能力を使う。

接近での1対1から能力を用いての遠距離戦まで幅広い範囲をカバーする。

召喚に伴う魔力消費だけで済み、ベリアルが戦っている間はベリアル個人の魔力を消費する。

どんなに攻撃を受けても、ディフェンダー自身が消さない限り消える事はなく、忠実に命令を実行する。

『復讐呼びし龍殺しの魔剣』（バルムンク）

ランク：A++      種別：対城宝具      レンジ：1～99      最大捕捉：  
1000人

ニーベルングンの歌に登場した魔剣。

どこから手に入れたのかは定かではないが、彼の持つバルムンクは龍神すらも斬り伏せたものである。

真名解放と共に、光となり光速の斬撃を放つ。

その斬撃は全てを切り裂き、特に龍種に対して絶大なる威力を発揮する。

しかしながら使っていないという罫

固有結界『今は遠き幻想郷』

ランク：EX      種別：?????      レンジ：?????      最大補足：?????

恭が愛し、愛された妖怪の楽園。

そこに住む、彼の戦友や友達を呼び出す固有結界を創り出す。

呼びだされる者達の例としては、

紫、鬼神、天魔、龍神、さとり、鬼の四天王（一人除く）。

百鬼夜行以上の恐ろしさである。

---

全てが妄想、しかもどっちもまともにやった事ないし読んだことない。

アニメしか見てません、サーセン

ちなみに、バルムンクの性能はグラムを参照してます。

みんなで（ryのwiki様の所のグラムですね。

## 18話（前書き）

更新遅れてすいまっせんしたあああああ！！！！

インフルエンザにかかったり、身内でゴタゴタがあったりしたので更新できませんでした。

これからもしばらく忙しいので、一週間に一回更新出来るかどうかって処かと思えます。

重ね重ね申し訳ないです。

## 18話

・ ・ ・ o t h e r   s i d e

ここは幻想郷のとある平原。

その中でも、少し小高く周りを見渡すと人里や、妖怪の山などが見渡せる場所だ。

そこに一人の人間のような生物と、二人の妖怪が立っていた。

「・・・ずっと地底にいと、地上の変化に気づけない物ですね」

そう言う少女は古明地さとり。

彼女は幻想郷に来てから、地底の管理を任されてきた。

だからこそ、地上の人里や妖怪の山の事をよく知らないのだが。

「お姉ちゃんは地上に出れないもんね。私は結構出てるけど。」

「まあ、そうだろうな。俺は基本地上で生活してたからそうでもないけど」

それに答えるのはさとの妹である、こいしと、人間っぽい生物の武幻恭。

つい先日、龍神と戦い勝利を収め、幻想郷の賢者である八雲紫に許可をもらい、古明地姉妹と一緒に地上に出てきたのだ。

まあさとり以外は地上によく出てきているので、それほど気にする事もなかったかもしれないが。

「ま、まあ私には地上の事はよくわからないので、行先は二人に任せますよ」

「ん、私も出てきてるって言っても知り合いが居るわけじゃないからな。」

だから行先はお兄ちゃんに任せるよ」

「むう・・・俺に任されてもなあ・・・」

とりあえず天魔の所か人里か？けど山登るのめんどくせえしなあ」

「じゃあ人里ですね。でも私達妖怪でも入れるのですか？」

「大丈夫だろ。天狗やら狐やらが偶に来てるしな。」

多分人を襲わない限り拒否されるってのはないと思う」

「じゃあ決定だね！しゅっぱーっ！」

こいしの元気な掛け声と共に、3人組は人里目指して歩いて行った。  
・

---

・・・恭 side

「とうちゃーく」

こいしはいつでも元気だねえ・・・お兄さんはうれしいよ。

「ここが人里ですか・・・以外と大きいんですね」

「ま、幻想郷で唯一の人間の集落だしな。山や森に住む物好きな奴もいるけど、大体の人間はここに住んでるんだから自然と規模が大きくなるんだろ」

「そんなのどうでもいいから早く入ろうよ！人里は私も来たことないんだから！」

・・・ん？人里に来たことない？

ああ、能力効きづらい奴が偶にいるからか。俺とか。

そりゃ人里で姿認識されてないときにいきなり見つかったら良くは思われんわな。

「んじゃ入るか。まず慧音・・・人里の守護者の所行くか」

元気に歩いていくこいし。

・・・道分かんのか？まあ間違えそうになったら言えればいいか。

さとりは相変わらず俺の横で少し居心地が悪そうについてきている。そりゃそうか。周りが人間ばっかだし、人間に良い思いなんて余りないだろうしな。

心読める、つてのは便利なもんだけど反面デメリットもでかいんだよな。

・・・それにしても変な感じだな・・・

これは・・・妖力か？里の周りに少し強めの奴がいるな・・・さとり達は気づいてないし、里にも警戒してる様子はない・・・つてことは用があるのは俺か。

慧音いの家に着いたらさとり達任せてちょっと様子見に行ってみるか。

そんなこんなでこいしが道間違えたり、里の人にちよくちよく挨拶したり（一応俺も里の防衛はしてるから人脈はそこそこある）団子屋寄って土産買ったりで、少し時間かったが慧音の家に着いた。

「ここが慧音の家。基本的には寺子屋で子供たちに勉強教えてるから横に寺子屋がある。

ま、他の事は本人に直接聞いてくれ。

おゝい！慧音ゝ！」

俺が名前を呼ぶと、少し待ってくれと聞こえた後バタバタと走る音が聞こえてくる。

「すまない、待たせてしまったな・・・と、恭だったか。横に居るのは？」

「俺の家族」

「初めまして、古明地さとりと申します」

「お姉ちゃんの妹のこいしだよー。よろしくねー。」

「この里で寺子屋をやっている、上白沢慧音だ。よろしく。それで？恭が私の所に来るなんて珍しい事もあるものだな」

「珍しいとか言うたっての・・・ま、今日はさとり達の紹介に寄っただけだよ」

「今後もお世話になるかもしれませんが、その時はよろしく願います」

「ま、そう言うこと。さとり達は地底の妖怪だけど、一応紫には許可取って地上に出てきてる。

それに地上にいる間は俺も一緒にいるし、そもそも地上に出てくる奴らは基本無害だから安心していいと思うぜ」

「地底の妖怪だったのか・・・恭がそう言うからにはその通りなのだろう。

里の者達には説明しておこう。それで、用はそれだけか？」

「んにゃ、地上にいる間さとり達の話し相手になってやってくれ。

地底に居る時は限られた奴らとしか話せないからな、知らない奴と話すのも新鮮でいいだろ」

「なるほど、それも一理あるな。それに、人里の皆とも打ち解けやすい」

「てことでさとりにこいし、早速慧音と里回って来い。俺はちょっと出てくる」

「え？恭さんは一緒じゃないんですか？」

「ああ、ちょっと里に入る前に変な妖力感じてな。思い違いだったらいが、襲おうとしてるならさっさとぶっ潰さないとならんしな。だから慧音、二人を頼んだ。」

「そう言うことなら・・・分かりました。頑張ってください」

「頑張つてね」

「おう、ちゃっちゃんと終わらせてくる」

---

てな訳でやってきました魔法の森。

相も変わらず茸の胞子やらよくわからん植物やらで埋め尽くされているな。

「で、何の用だ？」

「アハハ、やっぱり気づいちゃうんだ。噂には聞いてたけどさすがだね」

そう言ってくる金髪少女・・・いや美女といってもいいかもしれない。

彼女の背後は向こうが見えないほど暗く、吸い込まれそうなほどの漆黒の闇がある。

ここから分かる事は・・・

「ルーミア・・・闇の妖怪か」

「ご名答」よく分かったね？」

「常闇の妖怪、永久の闇、色々呼び名はあるが、その名を知らない者はいない。

常に闇に包まれ、人を襲う。人里ではお前ほど恐れられている妖怪

はいないよ」

そう、今のルーミアは所謂EXルーミアな状態なのだ。

その名が広まったのが10年ほど前、それから幾人もの退魔師が討伐に向かったが、全員が戻ってこなかった。

幸いなことに、そこの弱小妖怪と違い積極的に人を襲うことはなかったが、それでも1年に結構な人数が襲われていた。

俺も何回か討伐（という名の封印）に向かったが、生憎全てでルーミアを見つけることができなかった。

「で、そんなお前が何の用だ。俺に見つかるように仕向けたってことは殺されたいってことか？」

「まさか、そんなことある訳ないじゃない」

「ただちよつと龍君に面白い事聞いちゃってね。面白い人間が居るって」

「龍君・・・ああ、龍神か。それで俺を呼んだってことか。何が目的だ？」

「ん、ちよつと・・・ね・・・」

「まず、龍君に戦って勝ったって聞いたけどほんと？」

「勝った、とは言い難いけどあいつが言ったならそうだろうよ。

「あんなもん不意打ちした上にあいつが本気じゃなかったからああなっただけだ」

「不意打ちでもなんでもそれだけの力量があるなら十分だよ。それで、本題なんだけどね。」

・・・私を封印してくれないかな？」

・・・あ？

こいつ何言ってるんだ？

「正気か？妖怪が自ら封印を望むなんざなにを考えてやがる」

「私が闇の妖怪ってことは知ってるよね？」

だからさ、世界の闇の部分・・・っていうのかな、そういうのが増える度に私の力は増えるの。

でもね？最近はそのじゃない。暴走しそうになるのよ」

「暴走？」

「そう、暴走。闇っていう物を司って、その上で力を行使する存在が私。

その私が暴走するってことは、世界の闇がこれまできれいにならないうほど深く、濃くなっているってこと。

封印っていうのはね、私が死んだら闇自体が暴走するからなの。

だから、私の力の行使の部分を封印することで暴走出来なくして、その上で私が生きていられる程度の封印が掛けられそうで、そのことを理解出来そうな人間って貴方くらいいなかったの」

「・・・いくつか疑問があるが、まず一つ。

なぜ龍神に封印を頼まなかった？あいつなら能力使えばどうにでもなるだろ？」

いや、あいつが無理にしても紫に頼めばいいだろう」

「龍君って一応は神でしょ？神の力の行使って自然と私達妖怪みたいな存在とは相性が悪いの。」

だから龍君に封印を頼む事は出来なかった。

妖怪に封印の術が使えないとは言わない。紫は実際使えるしね。でも、私を封印するには紫じゃ妖力が足りない。

本当は人間もそれほど良くはないんだけどね、貴方はどっちかというと妖怪側こっちに近い存在だから」

俺が妖怪側に近い、つてのは人間と過ごす時間より妖怪と過ごす時間の方が長いってことが関係してるのか？

それとも考え方の問題か？

ま、それは後々考えればいいか。

「なるほど、な・・・

次の質問だ、闇が暴走するとどうなる？」

「闇が暴走するっていうのは世界が闇に包まれるっていうのと同義なんだよ。

例えば、闇、って一言で言えばそれまでだけど、色々形があるの。

それは決まった形はないけれど、何にでもなる。そんな存在。

形がないからこそ、それを無くす事はできない。ぶっちゃけて言えば世界の終焉だね」

ふむ、それが本当と仮定するなら、下手な奴には頼めない。

変なのなら封印した後に殺したりしてもおかしくはない。寧ろ封印だけで終わるほうが稀だろう。

だからこそ、頼む相手は選ばなければならない・・・か。

「最後の質問だ、力の封印と言ったな？それを施されて、お前はど  
うやって生きる？」

力を封印された状態では襲われたら一溜まりもないだろう」

「それは・・・その時に考えるわ。」

つまり考えてなかった、と。

ま、封印した後身寄りがないなら俺が引き取ればいい。  
俺の家も一応人里にあるしな。

「・・・引き受けて、くれない？」

そう、少し悲しそうな声でルーミアは頼んでくる。  
悲しいか・・・それは当り前か・・・

封印なんて自分からされたくてされる物じゃない。  
それでも自分が封印されないと自分だけの問題じゃなくなる。  
・・・ジレンマ、か

「・・・分かった。最善を尽くして封印を施そう」

「っ！ありがとう・・・」

「ま、今すぐには無理だけど、出来るだけ早く封印符を作る。  
それで着けている間は封印されて、はずせば封印が解けるようにし  
ておこう。」

それならもし危ない時でも大丈夫だろ？  
あと、封印された後は俺の家に住むといい。人里だがちゃんと説明  
すれば住める」

「なんで・・・そこまでしてくれるの？」

「助けたい、と思ったら何が何でも助ける性分だね。  
生憎、断つても無理やりにも助けさせて貰う」

「お人よしって言われない？」

「言われるな。気にしたことないが」

「クツ、アハハハ！予想外に楽しめそうね。じゃあ封印の件とその後世話、頼むわ」

「ああ、引き受けよう」

「ま、そんなこんなで俺の家に住みつかせるから。慧音、説明頼んだ」

「どうしてお前はそう厄介事を抱え込むんだあああああああああああああああ！！」

「・・・ま、慧音がストレスでマツハっぱいけど説明は任せよう。俺がやるより慧音がやる方が信用されやすいし。」

その後、さとり達と合流、一通り地上を探索した後封印符の作成に取り掛かった。

さとり達には悪いと思ったが、少しでも早く符を作った方がいいと思ったから、リアを付けて先に地底に帰らせた。

さとりが残念がっていたが、これが終わったらまた構ってやろう。

## 18話（後書き）

地形？自分で作ればいいじゃない。

設定？自分で改変すればいいじゃない。

って事で俺流設定全開の話でした。

ルーミアの能力については完全に二次だと思っています。

公式でEXとかないですし、闇が暴走（笑）もないですし。

ちなみに、妖力（霊力・神力）設定

龍神<<恭<<無界 ルーミア<紫

って感じの設定です。無界さん意外な強さ。

・・・無界さんにはまだ裏設定残ってるんだけどね

そして原作改変。

ルーミアが人里に住むようになったので紅魔郷で出ない可能性が出てきました。

しばらく後なのでどうしようかなー、って感じです。

出ないなら出ないで、リアか恭を突撃させますけどね。

## 番外2 天狗と悪魔の今（前書き）

天魔の日常

リアの日記

の二本立てです。

後々思界も追加するかもです。

日曜に上げようと思ったけど二日遅れました。すいません。

## 番外2 天狗と悪魔の今

~~~~~天魔の日常~~~~~

妖怪の山。

その名の通り妖怪や妖獣と言った、人外の者達が暮らす山である。

そんな山を一筋の光が駆ける。

通常の光は直線的にしか進まないが、そんな法則なんぞ知ったこっちゃないと言わんばかりに不規則に動き回り、すべてを置き去りにしていく。

その光の主は「風魔雷光」。

天狗の首領であり、妖怪の山を統べる妖怪だ。

彼の能力は「光になる程度の能力」。

「操る」でも、「司る」でもない、「なる」。

その名の通り、操ったり出来ない代わりに光自体になれる能力である。

その能力は彼自身でもよく把握できていない。

ちゃんと使いこなせればそれは凄まじい能力なのだが、まだそこまですってはいない。

例をあげれば、○NE P I E C Eの黄猿だろう。

・まあそんなことは置いておいて、彼が今何をしているかというところ。

「おーい、どこいったよーい」

迷子探しである。

哨戒に出かけようとしていた時、とある親子から子供が帰ってこないと言われたついでに探しているのだ。

本来、哨戒などという仕事は白狼天狗などの所謂下っ端の仕事であるが、自分がやった方が効率が良い物は自分でやるという彼の性格から、下の者の反対を押し切り哨戒をしているのだ。

・・・そのため、天魔と哨戒が被った日の天狗は緊張しすぎて仕事にならないと言った弊害も出ているのは彼の与り知らぬ話である。

閑話休題（使い方が間違ってる気がしないでもない）

「ったく、犬走のももう少ししっかりしてほしいもんだよ」

もう分かると思うが、迷子になっているのは犬走いぬばしり 椀もみじ

白狼天狗が仮にも天狗の長である天魔に頼む、というのはどうかと思うが、それは彼が下の者から親しまれているという事だろう。

「と、若しかしてあれかね」

天魔の視線の先には、白い髪の子が切り株に座り込んでいる。右足から血が出ており、歩けないようだ。

「やれやれ、心配したよ、っと!？」

そう言っただけの彼女の前に降り立とうとした時だった。

「GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!」

「おいおい、なんでこうめんどくさい事を運んでくるのさ・・・」

巨大なオオカミの群れが周りを囲んでいた。

所詮オオカミなので、本来なら天魔の敵ではないのだが、今は桜がいる。

「逃げる、つてのは簡単だけど放っておいたら面倒くさそうだしねえ・・・」

「ちよいと失礼するよ」

「えっ・・・てん、ま・・・さま・・・?」

「はいはい、驚くのもいいけどちょっとじっとしてなさいねえ」

そう言つて桜を抱き上げる(所謂お姫様抱っこである。桜が恥ずかしがっている事に気づいていない)と、オオカミ達を正面に見据え、唯ひたすらに蹴りを放つ。

レーザー光、という物を知っているだろうか?

これは危険度毎にクラス分けされており、最高クラスの4にもなると、皮膚に当たると火傷を起こし、物に当たれば火災を生じさせるといった現象も起こせる。

さらに、昨今で言えばレーザービーム兵器と言った物まで出来ている。

それらは無人飛行機すらも数秒で焼き払うという驚異的な威力を持っている。

さて、そこで本題に入るのだが天魔の能力は「光になる程度の能力」だ。

つまり、そういった物まで再現、むしろそれより高エネルギーの物を放つ事が出来る。

そんなものを浴びたオオカミ達かというと・・・

「うう・・・」

消し炭となっていた。

桜はそんなものを見慣れていないのか目を覆い、鼻を押さえている。

「さてはて、桜ちゃん？だっけか？家帰ろっかいね」

「は、はい！」

「ありがとうございますっ！」

「いいさね、下のもんの世話するのも上のもんの役割だ。ほら、もう行っていいよ」

「はっ、失礼します！」

そう言い、桜を連れて部屋から出ていく天狗の親子。

桜はトテトテと父について行き、扉の前でペコリとお辞儀をすると出て行った。

「雷光様も物好きですねえ。普通、組織の長って自分から出て行っ

たりしませんよ」

「私は長、っていう感覚はないよ。
それにあれだろう？下の者の辛さを知らないと上司としてやっていけないよ」

「ハハッ、私達は良い長を持てて幸せですよ」

と、天魔と会話を交わすのは烏丸陽炎。
一応大天狗筆頭の実直補佐である。

そんな二人は軽い雑談を交えながら部下からの報告をまとめてあげていく。

そんな、他愛もない彼らの日常だった・・・

「失礼致します！萃香様がいらっしやいました！」

訂正、今日はもう一波乱ありそうである。

~~~~~終~~~~~

~~~~~リアの日記~~~~~

○月×日

悪魔会議。

七つの大罪を司る悪魔とそれを統べる魔王が数年〜数十年に一度集

まり、会議という名の宴会をする。

今日はその日だ。

ご主人やさとりさんには会議があるから魔界（この幻想郷の魔界とは違う場所だが）に帰ると言っている。

そういえば、ベリアルを私が継いで初めての顔合わせだ。

サタンやルシ兄はこうなった事は知っているだろうが、マモンやレヴィは知らないだろう。

あいつらは馬鹿というか、なんというか・・・

・・・本能の塊？みたいなのだし。

レヴィはベヒモスと幸せにやってるんじゃないかな。

マモン？あいつはお金以外に興味持たないから論外。

サタンに言われても「戦うくらいなら金に埋もれて死ぬ」って言うてたし。

一応神達との戦争会議の時だったかなあ・・・

そういえばベルにも言っていないな。

ベルなら私を見た瞬間色々聞いて、世界の仕組みまで調べそうだな。

・・・そう思うとなんか行きたくなくなったな。

でも行かないとルシ兄とサタンに殺されそうだし行くしかないか。どうか、平穏に終わりますよう・・・

月×日

悪魔会議で皆に会ってきたけど、やっぱり驚いてたね。

性格が全然違うし、性別も変わってるしね。

性別変わるなんてのは、ベルの専売特許だしね。

前は戦闘狂みたいな性格で今は妹、って言ってたのがレヴィだった

つけ。

久々に悪魔会議であいつらに会ったからか、力が少し戻ってきた。本来、僕が使うのは炎。

それがどう罷り間違ったのか、神——正確に言えば世界か——は僕に雷の能力を与えた。

そして、幻想郷こっちに帰ってきてから能力が変質した。それは『黒炎を操る程度の能力』

黒炎は地獄の炎。

すべてを焼き尽くすまで消えない炎。

それに加えて、身体能力も上がった。

多分、今なら無界と良い勝負なんじゃないかな？

でも無界ってあれで封印してるっていうんだから反則だね。

強すぎる力は身を滅ぼす、って言ってたけど、正直ご主人とか人間ではありえないよ。

あれでなんで人間でいられるのか不思議でならない。

ルシ兄やベルゼはご主人の事話したら面白そうにしてたし、サタンもなんか「そっちに遊びに行こうか・・・」って言ってたのがすごい怖いよ。

正直、サタンが来たら幻想郷滅ぶんじゃないかな？

・・・ご主人なら何とかなりそう、って思った自分が憎いよ。

近々来るかも、ってご主人達に言っておいた方がいいかな？
紫はすごい苦労しそうだけど。

~~~~~  
終~~~~

## 番外2 天狗と悪魔の今（後書き）

魔王とか魔神は諸説ありますが、私の所はこんな感じでいきます。

サタンⅡ大魔王・悪魔の頂点

ルシファーⅡ傲慢を司る。サタンⅡルシファーって見方もあります  
が、私の所はこうします。呼び方はルシ兄

ベルゼブブⅡ暴食を司る。呼び方はベルゼ。

ベルフェゴールⅡ色欲を司る。呼び方はベル  
色欲司ってんなら性別も変えられんじゃね？っていう安易な発想か  
ら性別変えられるようになっちゃった人

レヴィアタンⅡ嫉妬を司る。呼び方はレヴィ  
伴侶となる雄がベヒモスと言われている、と何処かの所でみたので  
こうなりました。

マモンⅡ強欲を司る。呼び方はマモン  
金の亡者。

アスタロトⅡ怠惰を司る。呼び方はアス  
作中で作者に忘れられてたかわいそうな人。

これにベリアルで、七大悪魔と大魔王の構図になります。  
ついでにリアがパワーアップ。炎が使えるようになったよ！

## お知らせ

えー、とてもお久しぶりです。

最近こちら（喧闘記）とネギまの方の作品が全く更新出来ていない件ですが、只今喧闘記をほぼ全て書き直しています。

理由としましては、天魔・鬼神・恭等々の設定に矛盾が多く、作者自身も見切り発車で書き始めたため、後付け設定が増えすぎて良く分からない状態になったためです。

その関係で、ネギまの方の作品も書き直す事になります。

という事なので今の喧闘記、並びにネギまについては現段階（喧闘記は龍神終了後、ネギまはネギが来る直前）までを修正出来れば、現在の作品を削除し、新しく「東方喧闘記」並びに「魔法先生ネギまー」幻想郷から麻帆良入り」を投稿したいと考えています。

予定としましては、作者の受験が終わる1月下旬～2月中旬を予定しています。

評価してくださった方々や、お気に入り登録してくださった方々には申し訳ありませんが、また見かけましたら読んでくださるとうれしいです。

以上、作者レイクでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9260s/>

---

東方喧闘記

2011年11月4日06時12分発行